

陽だまりと歌姫の恋

穂乃果ちゃん推し

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何処にでもいる様な高校生、大空冬也《おおぞらとうや》。彼には2人の幼馴染が居た……1人は、父親に音楽を認めさせるため、孤高となつてしまった歌姫……湊友希那。もう1人は、底抜けの優しさと面倒見の良さで、彼と友希那を支える……今井リサ。

8年前……冬也は、2人の前から姿を消した……。しかし、8年の時を得て冬也が戻つて来た先で経験したのは、異常な程の恋を抱いた幼馴染だった！

目次

第1章：新たな花、芽吹く時

BEGINS 《ハジマリ》	1
リサの手料理	7
歌姫の襲来	15
少女たちと少年の邂逅	23
弟子志願	31
いざ、花咲川学園へ	38
友希那のお説教	45
転入初日	51
再会……そして	60
バンドへのお誘い	66
恐怖	74

説得	79
変化	87
課題？	96
バンド名を決めろ！	104
新たな仲間	113
新参者の奏でる音色	122
セトリリストを考えろ！	131
番外編《Side Story》	
【誕生日回】陽だまりの少女の生まれた日	141
159	
【誕生日回】銀色歌姫の生まれた日	

第1章：新たな花、芽吹く時

BEGINS 《ハジマリ》

〔※回想※〕〔8年前〕

？「何で!? どうして!？」

日もそろそろ傾き始めた、夕暮れのこの頃……一人の女の子が涙を流しながら声を上げていた。

？「すまない、友希那……」

？「落ち着きなよ、友希那……」

友希那「これが落ち着いてられる!?! 冬也が……私たちの前から居なくなるんだよ!?! 落ち着ける訳ない!」

？「気持ちは判るよ……でも、友希那……そろそろ……」

友希那「分かってる!……けど……」

冬也「それじゃあ……はい、これ」

冬也はそう言うと、ダンボールの中から2つの買い物袋を取り出して、大きい方を友希那に、小さい方をリサにあげた。

友希那／リサ「こ、これは？」

冬也「俺からのプレゼントだ。こっちはリサに、こっちの大きいのが友希那のだ。」

リサ「これは……ピアス？」

友希那「……にや、ニヤンちゃん／／／」

冬也が友希那とリサに渡したのは、猫の形をした筆箱と星型のピアスだった。冬也は、2人を見つめてこういう。

冬也「必ず、絶対に帰ってくる……それを俺と思ってくれ、そうしたら少しは気が紛れるだろう？」

リサ「冬也……」

友希那「冬也……」

冬也の母「冬也、そろそろ……行くわよ」

冬也が2人と話しているタイミングで、冬也の母の呼ぶ声がした。冬也はそれに反応して返答を返す。

冬也「分かった……あ、リサ」

リサ「どうしたの？」

冬也「リサ……友希那の事を、頼むぞ」

リサ「うん！」

リサにそう告げた冬也は、両親と一緒に車に乗り、その場を去って行った……。

——「回想 了」——

「そして……今」

冬也「……うん、ここだな」

8年の時を得て、大空冬也は、生まれ故郷へと帰って来た。表札には『大空』と書かれており、本人の家である事が分かる。冬也は中へと入り、荷解きをする事にした。

冬也「あの頃のまんまだ……変わらないな、俺も……この街も」

冬也は荷解きを順調に進めていた。その時、家のインターフォンが鳴る！

冬也「あつ、はい！（どうしたんだろう……宅配便なんて頼んでないんだが……）」

少々不安な気持ちでドアノブを回した。すると、その目に飛び込んで来たのは……！

？「やつほー☆おかえり、冬也！」

冬也「リ、リサ!?……た、ただいま」

リサ「もおく……元気ないぞく?まつ、いいか!早速だけど、上がってイイ?」

冬也「悪いが荷解きがまだ終わってないんだよ……」

リサ「だったら、あたしも手伝う!それに……冬也と少しでも一緒に居たいからね」

冬也「分かった、上がれよ」

冬也はそう言つてリサを自宅に招き入れる。しばらく作業を進めた時、リサの身なりを見て、気になった事があったので、冬也は聞く事にした。

少しして2人が時計を見ると、そろそろお昼時に差し掛かろうとしていた。

リサ「お昼はどうするか……決めてるの？」

冬也「決めてないが……何か考えてるのか？」

リサ「私の……手料理、食べてみる？」

冬也「……リサの、手料理？」

帰って来たばかりの冬也を待ち受ける変化は、まだ始まったばかりだ……。

リサの手料理

リサ「お昼はどうするか……決めてるの？」

冬也「決めてないが……何か考えてるのか？」

質問を投げ掛けたリサに、冬也は質問で返す。すると、リサはこんな事を言い出す。

リサ「私の……手料理、食べてみる？」

冬也「……リサの、手料理？」

リサ「うん、どうかかな？」

冬也「是非、食べたい！」

リサ「じゃあ……わかった！冬也のために、この今井リサ、腕を奮っちゃおうよ！」
冬也「ああ、頼む」

そう言ってリサは台所に立つ。リサはテーブルの上に置いてあったエプロンを身に付け、冷蔵庫を見る。……見たは良いのだが……。

リサ「……………」

冬也「…………どうした、リサ？」

リサ「食材が……………一つもない」

冬也「…………ま、まあ……………引越して来たばかりだから、それくらいは仕方ねえだろ」

リサ「だったら……………買いに行こっ！」

突然何を思い立ったのか、リサはエプロンをスグに脱ぐと、バッグを肩から提げて、冬の腕を取って進み始めた！

冬也「え？ちよっ……………リサ？」

リサ「良いから……………行くよ！」

〔街中〕

冬也「うわあ……………懐かしいな」

リサ「でしょ？引越した所よりも、生まれ故郷の方がいいでしょ？」

冬也「ああ……………何だか、とても落ち着く」

リサと冬也は街中を歩いて、思い出話に耽っていた。すると、2人の繋ぎ目が目に入ったのか、冬也が声をかける。

冬也「ん？どうしたんだ……これ？」

リサ「あたしから離れられないようにする為だよ」

冬也「だからって……恋人繋ぎをする必要無いじゃん」

リサ「ううん……冬也はあたしの彼氏だからさ。大好きなんだ……冬也の事。……ダレニモワタシタクナイクライ／／……タトエ、ユキナデサエモ……」

冬也の質問に答えたりサは、途中からボソボソと声を発していた。……その中には、とんでもない様な事が発言されていた気がしないでもないが。

冬也「なあ、リサ……さつきは何て言ったんだ？」

リサ「な、何でもないよ！／／／」

冬也「？」

冬也は首を傾げながら、この事についての言及を辞めた。それを見たリサは内心ホツとしていた。そうこうしている間に、スーパーへと辿り着いた。入るなり、リサはカゴを取って冬也に押し付けた！

冬也「ちよっ！リサ!？」

リサ「天然ジゴロな冬也には分かんないよ！あたしからのお返し！この買い物中、冬也は荷物持ちね！……それをしないと、あたしの手料理、食べさせてあげないから／＼

冬也「わ、分かった……」

リサの無茶な要求を呑んだ冬也は、買い物の際の荷物持ちを行なった。リサが買った量は、2ヶ月は優に持ちそうな量で、道具も多めだった為……冬也も微力ながら財布から英世さんを1枚出した。2000幾らで済んだ為、出費はそこまでは無かったものの、冬也の財布から殆ど出された為、ギリギリになってしまった。

リサ「よし！これだけ買えば大丈夫でしょ！」

冬也「お、お前……流石にこれは大丈夫だと思うがよ……何で俺の財布から、殆ど

の額を抜いたよええ!？」

リサ「言ったじゃん、『仕返し』って／＼／＼」

冬也「クソっ……（この消費は痛いぞ……バイトをしてお金を稼ぐか?）」

謎の後悔と共に、リサと冬也は家へと帰る。そして暫くした後……。

—————

〔大空家：リビングキッチン〕

リサ「それじゃあ……作るからね〜!」

冬也「よろしく頼む」

その言葉を聞き、リサは調理へと取り掛かった。リサの目の前には、彩り豊かな野菜や麵の袋が置かれていた。それから数分後……。

リサ「出来たよ〜!焼きそば!」

冬也「おおっ!」

リサ「それじゃあ……食べよつか!」

その言葉を皮切りに、リサと冬也は食べ始める。

冬也「マジか！冗談抜きでうめえ！」

リサ「良かった〜！何か困ったら、何でも言ってね！あたし、冬也のためなら何でもするから！」

冬也「ありがとう、リサ！」

そんな会話を交わしながら、2人は食べ進めて行く。そして食べ終わり、少し落ち着いて来た頃……。

冬也「ふう〜……美味かった！」

リサ「あたしも〜……自分で作ったのを、自分で食べるって、何だか新鮮……」

冬也「時間は大丈夫なのか？」

リサ「あ……そろそろ、あたしはお暇しようかな。あつ、連絡用アプリって持っている？」

冬也「持ってるが……」

リサ「交換……しない？」

リサの言葉を皮切りに、2人は連絡先を交換し合った。リサの携帯には冬也の連絡先が、冬也の携帯にはリサの連絡先が登録された。

リサ「それじゃあ、何かあったら連絡するね！」

冬也「ああ、分かった」

そうしてリサは自宅に帰って行った。その時のリサの顔が紅潮していたのには、冬也はこの時は気付く由もないのであった。

—————

〔今井家：リサの部屋〕

その日の夜遅く……リサは誰かと、連絡用アプリで連絡を取り合っていた。

リサ「冬也……帰って来たよ」

？『随分と長かったわね』

リサ「ごめん……でも、これからはずっと一緒だよ」

？『そうね。ゼツタイニドコニモイカセタリナンテシナイ……』

リサ「ホカノケガラワシイオンナノニオイガツクノハソシシナキヤネ……ユキナ」
友希那『ええ……』

1人の少年を愛する者が、リサの他にももう1人……その人物が、着々と動き出そう
としていた……。

歌姫の襲来

〔大空家…冬也の部屋〕

冬也「……………」

俺は自分の部屋のベッドで就寝していた。流石にこの時間は誰にも邪魔はされたくない。……………さて、俺の事はこれくらいにして、本筋に入るとしようか……………。

冬也のスマホ♪♪♪

（BGM…高橋洋子「残酷な天使のテーゼ」）

冬也「誰だよ……………」

俺は少々ムカつきながらも、枕元に置いてあったスマホを手取る。そして見てみると、着信が届いていた。送信相手は、……………彼奴からだ。

冬也「何だ」

? 『何だとは随分なご挨拶ね、冬也』

冬也「ああ……悪い、友希那」

友希那『それはイイわ。だって、寝起きの貴方はとてつもなく機嫌が悪くなるでしょう?』

冬也「……っ。知ってたんなら、何故こんな朝早くに掛けてきた」

俺がいきなり起こされた不満を込めて友希那に聞くと、ある答えが返ってきた。

友希那『久しぶりに貴方の声が聞きたくなったのよ……ダメかしら?』

冬也「そ、そんな事は無い……」

友希那『ふふっ。そう言えば……昨日はリサとお楽しみだつたみたいね?』

冬也「ああ。でも、何故こんな事を?」

友希那『このパターンから分からない?……今日は私に付き合ってもらおうわよ』

冬也「分かった、後でな」

友希那『ええ』

その言葉を最後に俺と友希那は電話を切った。色々引き伸ばしちまったが……友希那は俺のもう1人の幼馴染だ。小さい頃から音楽が好きで、いつか友希那の父を超えたいとも言っていた。……そして、8年前俺が引越す時に、1番泣いていたのが、意外な事に……友希那だ。

冬也「……アイツには、悪い事したかな」

そう呟きながら俺は部屋の隅に立て掛けてある、黒いギターを手に取る。この黒いギターは引越した先で購入した物であり、ここに戻ってくる前まで結成していたバンドで弾いていた物である。俺はギターを見ると、誰にも聞こえないように声を発した。

冬也「お前の出番……作ってやれなくてゴメンな？でも何時か、必ず作ってやるからな」

そう声を掛けて1階へと降りた。材料については、昨日リサと買物に出掛けた時に、充分すぎる程買ったので暫くは困ることは無いだろう。今回は簡単な料理にしよう……そう決めた俺は準備に取り掛かる。

友希那は俺が出した紅茶に口を付ける。8年も見ない間に、こんなにクールになっていたのかと驚く自分がいた。紅茶を飲み干した友希那は、俺を見ながら聞く。

友希那「何時帰ってきたの？何も連絡が無かったみたいだけど」

冬也「昨日だよ……帰って来てすぐにリサが来たもんだからビックリしたよ」

友希那「そう……」

冬也「友希那こそ、元気にしてたか？」

友希那「ええ」

冬也「今でも、親父さんの音楽が好きだったりするの？」

友希那「……!!」バンツ!!

俺が友希那の親父さんの事について聞くと、何かの琴線に触れたかのようにテーブルを強く叩いた。紅茶の入っていたグラスがカタンと音を鳴らした。

冬也「ど、どうしたんだ……友希那」

友希那「私は……父を超えるわ。フェスに出て、頂点に立ち……私の音楽を認めさせ

るわ」

冬也「お、おおう……」

友希那「……貴方、ギターがあるでしょ？」

何を思ったのか、友希那から鋭い事を聞かれた！……1度も俺のギターの話はしてないぞ?!……どうしてわかった!?

冬也「……どうしてわかった？」

友希那「貴方の爪……綺麗に整えられてるわ。ギターを弾く為には爪の手入れも必要……だからよ」

冬也「へ、へえ……」

友希那「貴方のギター……聞かせてくれないかしら？」

冬也「分かった……部屋に行こうか」

そうやって俺は友希那を2階の俺の部屋に招く。ギターを弾く時は、2階の部屋の方が落ち着くから、2階の部屋で弾く事になっている。

—————

〔大空家：冬也の部屋〕

ギターのアンプを使って、音のチューニングを済ませた俺は友希那を部屋に上げる。今まで見たことのない眼光を走らせている友希那を前に、俺は声を発する。

冬也「それじゃあ……弾くぞ？」

友希那「ええ、始めて頂戴」

冬也「では、聞いてくれ。『ETERNAL BLAZE』」

その合図と共に、ギターだけでのソロを弾き始める。途中で歌も交えながら、友希那へと披露する。そしてざつと5分が過ぎた頃……。

冬也「ど、どうだ……？」

友希那「……単刀直入に言うわ。貴方、『Roselia』のマネージャーになつてみない？」

冬也「ま、マネージャー……？俺が？」

友希那「貴方となら、頂点を目指せるわ。その為にも、私は貴方が欲しいの。どうかしら？」

冬也「……分かった。よろしく頼む、友希那」

俺はこの日この時を境に、友希那の率いるバンド……『Roselia』のマナー
ジャーとなった。聞けば、音楽以外に時間はあまり割けられないらしい。……それでも
いいと思えた、彼女の瞳を見ていると……何かを見させてくれるかのような気がしたか
ら……。

少女たちと少年の邂逅

友希那にギターの演奏を聞かせた冬也は、友希那からRoseliaのマネージャーにならないかと誘いを受けた。それを、冬也は快くとは言えないものの承諾。それを受けて友希那は冬也をあるライブハウスへと案内する。

友希那「……」

冬也「……な、なあ……」

友希那「何かしら？」

冬也「何処に向かつてるんだ？そろそろ、場所を教えてくださいませんか？」

そろそろ痺れを切らした冬也が、未だに前をひたすら歩いている友希那に問う。すると友希那は、何を思い立ったのか……少し止まり振り向いてから言う。

友希那「……これからは、何があっても、他のメスに振り向いちゃいけないわよ？これから貴方が会う人達は例外だけどね？……イイわね？」

冬也「お、おう……出来れば、その濁った目をやめてくれ……」

友希那「ええ」

冬也がそう言うと、友希那の濁った目が元に戻った。『例外ってどういう事だ』なんて思った奴が居るかもしれないが……察して欲しい。ヤンデレが他のメスを視界に入れてしまうとどうなるか……お分かりであろう。

友希那「これから行くのは『C i R C L E』っていうライブハウスよ。そこに他のメンバー全員を待たせてあるの。普段はガールズバンドのライブで有名よ？」

冬也「そ、そうか……」

友希那「……」

その言葉を最後に、冬也と友希那はライブハウスへの道を歩く。途中から友希那が手を恋人繋ぎにして来て、視線で人を殺せそうな程の殺気を身体中に受けてたのは、また別の話である。

—————

〔ライブハウス『C i R C L E』〕

? 「こんにちは〜! ……あら? 友希那ちゃん! こんにちは! 今日も練習?」

友希那 「ええ」

? 「あら? この人は? 初めて見る顔だね〜」

冬也 「大空冬也です。よろしくお願いします」

冬也が挨拶をすると、それを見た女性は改めて自己紹介をする。

? 「私は月島まりなと言います。よろしくね、冬也くん」

冬也 「よろしくお願いします。ええつと……」

まりな 「気軽にまりなで良いわよ」

サラツと心を読まれた冬也は、改めて声をかける。それにまりなは快く応じる。そのタイミングを見計らって、友希那が声を掛ける。

友希那 「Roseliaで予約しているのですが……」

まりな 「分かったわ。Roseliaの娘たちは3番スタジオね。今日も頑張つてね。」

友希那「ありがとうございます、行くわよ……冬也」

友希那に連れられ、冬也はライブハウスの中へと入っていく。これから会う者達に期待を込めて……。

—————

〔3番スタジオ内〕

友希那「お待たせ」

？「あ、友希那さん……こんにちは。」

リサ「早速始めよ！友希那！」

？「友希那さん、あこ……ちよつと気になる事があるんですけど……」

友希那が入った直後に冬也が入ると、後ろの方にいる紫の髪をツインテールにした少女から疑問をかけられる。

友希那「ああ、彼の事ね？……紹介するわ、私とリサの幼馴染で、Roseliaのマネージャーをする事になった……」

冬也「大空冬也だ。よろしく頼む」

？「……でも、どうして……そ、その人が……ここに？」

？「そうですね、理由はあるんですか？」

友希那「ええ。彼はギターをやっているね、私とその演奏を聞いた時、とてつもない可能性を彼から感じたわ。だから連れて来たの、共に頂点を目指す仲間として。」

友希那が冬也の事を説明し終わると、リサ以外の3人は驚いた表情を見せながらも、自己紹介をし始めた。

？「では、まずは私から……私は氷川紗夜です。高校一年生で、担当楽器はギターをしています」

あこ「じゃあ次は……宇田川あこです！カッコイイ物が大好きです！中学二年生でドラムをしています！」

？「し、白金……燐子、です……高校一年生で、キーボードをしています……」

冬也「悪いな……氷川と白金は俺と同一歳だ。敬語は無しでいい」

冬也がそう言うと、紗夜と燐子はまだまだ不安はあるものの、何かを決意したかのようにならうに声を発した。

紗夜 「こちらこそ普段通りで構わないわ、冬也」

燐子 「こ、これから……よろしくね？冬也くん」

あこ 「何だか1人だけ苗字つてのも、不満だから……あこの事も！」

冬也 「よろしく、あこ」

あこ 「はい！」

3人が冬也に自己紹介を終えた所で、友希那が手を叩いて指示をする。

友希那 「練習するわよ！今回は『ONENESS』を中心に3曲を通すわよ」

4人 『はい！』

友希那 「冬也、貴方には私たちの演奏を見てもらうわ。貴方からの意見が欲しいの」

冬也 「1観客としての意見、という事か？」

友希那 「ええ。お願いするわ」

冬也 「分かった」

友希那はそう言うと、自身のポジションにつき、冬也は近くにあつた椅子にドアに背

を向けて腰を下ろした。それを見た友希那は声を掛ける。

友希那「聞いて……これが、私たちの頂点を目指す音楽よ」

その掛け声と共に、演奏が始まった。3番スタジオからはまさに『演奏中』を思わせるような威圧感と臨場感に包まれた。

「13分後」

友希那「……どうかしら？」

冬也「何でも……良いんだな？」

冬也は静かにそう言うと、左から順番に意見を列挙して行く。その意見に驚いた者が殆どだったと言っておこう。その後……。

紗夜「貴方って……何か楽器をやってたのよね？」

冬也『『やってた』とは失敬な……俺は今でもギターをやってる。だからギターの微妙なブレは分かるんだ。』

紗夜「そう……決めたわ」

紗夜は何かを思いついたかのように、冬也を見詰める。そして少ししてから発せられたのは、衝撃的な一言だった！

紗夜「私に……ギターを、教えてくれないかしら？」

弟子志願

紗夜「私に……ギターを、教えてくれないかしら？」

5人「え!？」

紗夜の突然放った一言に、紗夜を除いた全員が驚愕する。友希那とリサに関しては別の意味で捉えていたらしいが……燐子とあこは状況が整理出来ていたみたいだ。

冬也「どうして……そう思った？」

リサ「き、きつと……紗夜は何か勘違いをしてるんだよ……きつとそう、きつとそう」

友希那「確かに彼のギターの技術はピカイチよ。でも、誰かに教えられる程の技量は無いはず……!？」

紗夜「私が指摘されたポイント……自分でも分からなかったポイントなの。白金さんの言葉を借りるなら、『自信が無い』所なのよ。」

その言葉に今度は冬也以外の全員が驚愕する。何とかフォローに入ろうとあこと燐子は声を掛ける。

あこ「し、仕方ありませんよ！自信が無いポイントなんて、誰にでもわかる物じゃないんですから！」

燐子「そ、それに……弾いている時は、『間違った』と思っても、修正できませんし……」

紗夜「そこを的確に突いてきたのよ、彼の指摘は。」

友希那「そんな事……」

紗夜が簡潔に纏めると、友希那は声が詰まったかのような様に覇気が無くなっていく。それにはリサも同じみたいだ。冬也はしばらく考えてから、こう答える。

冬也「……分かった」

友希那／リサ『冬也!?!』

紗夜「それじゃあ……!」

一瞬紗夜の顔が明るくなりかけた所を見計らって、冬也は待ったをかける。

冬也「待った」

紗夜「!?……どうして？」

冬也「見るのはいい、それは誰にだってできる。だが、Roseliaは頂点を指すんだろ?……そうだよな、友希那?」

友希那「え、ええ……そうよ」

冬也から発せられた問いに、少したじろぎながらも同意の答えを返す友希那。それを聞いた冬也は改めて紗夜へと向き直る。

冬也「やると決めたからには、俺の全てをお前に教える。もちろん……手は絶対に抜かない。俺が『ここまでだ』と思ったら、今後一切お前の練習には付き合わない。……それが俺を師匠として迎え入れる為の最低条件だ、呑めるか?」

紗夜「分かったわ。私は絶対に手を抜いたりなんてしない。Roseliaが頂点に立つ為にも、私にギターを教えてくれないかしら?」

冬也「……分かった」

そう言うと、冬也は右手を差し出し、視線で合図を送る。そしてこう言う。

冬也「今日からお前を弟子として迎え入れる。俺の言葉は友希那の言葉と取ってもらって構わない。……良いよな、友希那」

友希那「……貴方には後でお灸を据える必要がありそうね」

冬也「……」

友希那「でも……分かったわ。Roseliaのギターを任せるわ、徹底的にシゴいてちょうだい」

最初に友希那が言っていた事が聞き取れなかったものの、友希那はそれを渋々ながらも承諾した。それを受けてリサが紗夜へと声を掛ける。

リサ「もし、冬也をあたしと友希那から奪うような事をしたら……許さないよ♪」
紗夜「……さて、どうでしょうか」

影でこんなやりとりがあったことを、ほかの4人は知る由もなかった。

――――
 〔大空家：リビング〕〔5時間後〕

Roseliaの練習を終わらせた冬也は、リビングのソファに座り込んでテレビを見ていた。時刻は午後8時を指そうとしている。

冬也のスマホ♪♪

(BGM:Roselia [Re:birth day])

その時冬也のスマホが鳴り響いた。1件は先程交換した紗夜からで、もう1件が母からのメッセージだ。確認の意味合いを込めて冬也はメッセージアプリを開く。

――――
 〔氷川紗夜：トーク〕

紗夜『先程の練習はありがとうございました』

冬也『別に構わない。さて、ギターを教える為に、日程を合わせて置きたい。何分こちらには引越して来て間もないからな、学校への転入手続きもあるから早めに決めて置きたい……どうだ?』

紗夜『分かったわ、少し予定を確認してみるわね。……あと、師匠を引き受けてくれ

てありがとう』

冬也『そうか。紗夜を徹底的にシゴいてやるからな……覚悟はしておけよ?』

紗夜『分かったわ、それじゃあお休み』

—————

〔母：トーク〕

母『冬也く、転入先の高校について提案があるのだけれど……いいかしら?』

冬也『何だよ』

母『もう……冷たいわね。まあ、いいわ。貴方……花咲川学園って知ってる?』

冬也『花咲川学園? 何だそりゃ』

母『今年度まで女子校だったんだけどねく、来年度からは共学の学校にするという事になってるらしいのよ』

冬也『……』

母『そこには、私の従姉……つまり、あかり姉さんが居るの。何と……花咲川学園の理事長をしているのよ! 私から話したら、喜んで引き受けるという返事を貰ったわく!』

冬也『……わかった、そこに行けばいいんだな?』

母『さつすが! 私の愛する息子! 分かってるわく!……それじゃあ転入にあたっての説明をしたらしいから、明日10時までに花咲川学園の理事長室へと行きなさいねく』

?……あ、そっちに行く際は私服でも構わないって事らしいから〜それじゃね! 始業式の日は伝えて? お母さん、そっちに行くから!』

冬也『分かった』

—————

冬也は母と紗夜からのメッセーجزの返信を終える。だが、この選択が後に大きな出来事を引き起こしてしまう事をまだ冬也は知らない。

いぎ、花咲川学園へ

「花咲川学園：正門前」〔翌日AM9：55〕

冬也「……お、大きいな」

母からの編入を薦められた冬也は、時間になる前に花咲川学園へと辿り着いていた。その大きさを見て、冬也は驚いていた。

冬也「すっげー綺麗な建物だな……」

警備員「ここに何の用ですか？」

冬也「あつ、すみません……こここの理事長に呼ばれている者ですが」

警備員「……分かりました。少しお待ちください？」

そう言って女性警備員は校内へと消えて行く。少ししてから、その警備員が何かを持ってから戻って来た。

警備員「お待たせしました。確認が取れましたので、理事長室へと向かわれて下さい。」

冬也「ありがとうございます」

警備員「それと念の為に、これを」

冬也は女性警備員から全面に『入校証』と書かれたネームプレートを受け取る。受けた冬也は早速首にかける。それを見た警備員は冬也を中へと通す。

「花咲川学園：理事長室前」

冬也「……ここだな」

少し校内に迷いながらも、冬也は目的地である理事長室へと辿り着いた。意を決した冬也は理事長室の扉をノックしようとする……すると！

？「あら？君はもしかして……？」

冬也「……ま、まさか……！あかり姉さん!？」

あかり「久しぶり〜！ここでの話も何だし、中に入っちゃって！」

廊下の途中で、何と叔母である花咲あかりと再会！再会を終えた2人は理事長室へと入って行く。

「友希那 side」

翌日になり、私は冬也にLINEのメッセージを送ったわ。送った目的はというと、練習がある事とそれの前に会えないかという事だったわ。……でも、肝心の彼はというと……。

友希那「既読が付かない……どうしてるのかしら、冬也」

トークルームにあるトークには『既読』が付いておらず、窓の外を見ても変化が無かったので、少し私は心配になってきていたわ。

友希那「……まさか、他のオンナ……？いえ、それは考え過ぎね。だって、冬也は何れ私の所に来るのだから……それにあの時のオシオキがまだだったわね……フフツ、Roseliaの練習の時まで無事に過ごせると、軽く思われては困るわね」

「友希那 side out」

「花咲川学園：理事長室」

あかり「どうぞそこに掛けて？あつ、紅茶とコーヒーだったら……どっち派？」

冬也「コーヒーをお願いします」

あかり「わかった、コーヒーね。……つて、そんなに硬くならなくていいわよ？いつも通りにしてて？」

そう言われて冬也は体制を楽にした。それを見たあかりは冬也の対面に座る。

あかり「それにしても久しぶりね、冬也」

冬也「あかり姉さんこそ、元気そうで……」

あかり「ありがとう。さてと……貴方をここに呼んだ理由を説明しないとね」

冬也「それは分かってるよ、あかり姉さん。態々の説明は大丈夫だよ」

話始めようとしたあかりを冬也が止める。それを見たあかりは「つ咳払いをしてから、話し始める。」

あかり「貴方には、残りの2年間をこの花咲川学園で生活して貰うわ。此方としては男子の貴方を、優遇措置みたいにはできないのだけれど……貴方はここでの生活を通して、生徒たちとの絆を深めて貰います。」

冬也「わかった……でも、それなら俺では無く他の男子でも良かったのでは？」

あかり「いいえ？貴方は前の学校では、すつごく活躍してたらしいじゃない。何でもバンドを結成していたのだからね？」

冬也「ああ」

冬也がそう答えると、あかりはさらに続ける。

あかり「この学校には、学業と芸能活動を並行している人物が居るの。……貴方もし、もしよ？芸能活動をしようとしているのなら、それなりの覚悟を持って欲しいの」

冬也「……分かった」

あかり「その反面……バンドの方は大丈夫よ！大きな大会とかは、必ず応援に行かせるようにするわ」

冬也「はい」

あかり「随分話が逸れたけど……貴方には4月9日、始業式の日に集会で挨拶をしてもらうわ。それに伴って、テーマ『これからの抱負』に沿って作文を描いてもらうわ。」

冬也「わかった、それって長さとかは？」

あかり「貴方に任せるわ、良いものを期待してるわね！」

あかりはそう言うのとひとつ息を吐く。そして少ししてから続ける。

あかり「それから……冬也、ここでの生活には馴染んだ？」

冬也「ああ、大分間隔が取り戻せそうだ」

あかり「良かったわ……でも定期的には、そっちに行くわね？ 貴方がどんな生活してるのか、私としては凄く気になるし」

冬也「分かった」

あかり「それじゃあ……話はこれでおしまい！ ありがとね、ここに来てくれて」

冬也は出されたコーヒーを飲み干して、理事長室を後にする。その時にスマホを確認したのだが、メッセージの量が半端なかったのだ！ それは殆ど全部友希那からの物だったのだ！

冬也「……ま、マジか」

そして追い打ちを掛けるように、LINEに着信が届く！

—————

〔花咲川学園：正門前〕

連絡を貰った冬也は正門へと急いでいた。そこには涼しい顔をしてご立腹の様子ので可憐なる少女の姿があつた！

冬也「……ゆ、友希那……」

友希那「さて冬也、今まで何をしてたのか……シツカリキカセテモラウワヨ？」

そしてその時の友希那の瞳から光が消えていたのは、冬也には知る由もなかった事なのである。

友希那のお説教

「ファミレス」

冬也「先ず……言い訳をさせてくれ、な？」

友希那「ええ……貴方の処分はどうとでもできるもの」

本当にご立腹の様子 of 彼女の彼女……湊友希那に、為す術もなくただただ焦りまくっている青年、大空冬也。冬也は今までであった事を経緯を含めて列挙して行く。

友希那「……」

冬也「ゆ、友希那……」

友希那「先ず1つ言わせて頂戴」

冬也「……な、何だ？」

いつものクールな声がさらに冷えたような声を出した友希那は、確認を取るために声を発する。それを冬也は身構えながらも了承する。

友希那「転入先の高校に行くまでには、スマホを見る暇があったはずでしょ？」

冬也「……は、はい」

友希那「貴方はそれを見もせずに、花咲川学園へと行っていたの？」

冬也「……か、返す言葉も無いです」

冬也は友希那の問いに関して、観念したかの様に返答を返す。すると友希那は何を思
い立ったのか、レストランの店員を呼ぶ。

店員「はい、ご注文をお伺いします」

友希那「大盛り激辛カレーを一つ、アイスコーヒーを一つ」

店員「……わ、分かりました。それでは少しお待ち下さい」

そう言うのと店員は店の奥の厨房へと引つ込んで行く。それを見た友希那は冬也へと
向き直る。

友希那「……まあ、貴方にもやるべき事があったという事よね。……そうよね、冬也」

冬也「……ごめん」

友希那「まあ……少し落ち着きましたよ。これでも食べて、ね！」

友希那が強い声でそう言うと、まさにタイミングを見計らったかのように店員が料理を持って来る。

店員「お、お待たせしました……こちらがアイスコーヒー、そしてこちらが大盛り激辛カレーになります……」

冬也「……マジか」

店員「ご注文の品は以上で構いませんでしょうか？」

友希那「ええ」

店員「それではごゆっくり……」

それだけ告げると伝票を刺して、店員は店の奥の厨房へと引っ込んで行く。それを見た友希那は、冬也に向かってこう言い放つ。

友希那「貴方……悪いと思ってるのよね？」

冬也「あ、ああ……」

友希那「言葉は上辺だけなら何だって言えるわ。ただ……責任は取ってもらわないとね」

冬也「……」ゴクツ

友希那「マネージャーなら、それらしい誠意を見せなさい。途中での再起不能は絶対に許さないわ、もしそれが発覚した時点で……紗夜との師弟関係も打ち切り、Roseliaのマネージャーも解雇処分とするわ。それが嫌なら、米一粒残さず食べ切りなさい」

冬也「は、はい……」

その言葉を承諾と見た友希那は開始の合図を出し、冬也はその言葉を聞き、食べ始めた。普段は辛い物が大好きな冬也でさえも苦戦する様な量であったとだけ言うておう。……それから15分後。

冬也「……た、食べ切ったぞ」

友希那「お疲れ様」

そう言つて友希那は伝票を冬也へと手渡す。まるで『今回の会計は全部冬也の奢りよ』と言わんばかりの空気を醸し出していた。

「ライブスタジオ C i R C L E」

冬也「……ううっ」

リサ「……ど、どうしたの？」

友希那「自業自得よ」

こんな会話が幼馴染3人の間で繰り返り広げられていた事を、紗夜とあここに燐子は知る由もなかった。そして……4曲を通し終わり、帰路につこうとした頃……。

友希那「今日は私と一緒に帰ってもらうわ」

冬也「……ど、どうしてだ？」

友希那「あら？今日の貴方には拒否権なんて無いわよ、もしかして……私から逃げたいなんて思わなかった？」

すんなりと心の内を当てられた冬也は、すごすごと友希那に引つ張られていった。そ

れを見た4人はポカーンと口を開けたまま立ち尽くしていた……。

—————

「大空家：冬也の部屋」

冬也「くっ……クソ、友希那め……後で覚えてろよ……」

冬也は未だに昼頃に食べた大盛り激辛カレーの余韻が残っており、紗夜から送られてきたLINEに気付くことも出来ずにいた。

転入初日

一晩立っても、友希那に食べさせられた激辛カレーの味がまだ口の中に残っている冬也。今日は始業式という事もあり、早起きをして準備をしている。

冬也「花咲川の制服は……これか。ここでもネクタイ式は変わらないんだな……なんてな。前通つてた所がブレザーだったから、少し新鮮かもしれないな」

そう言つて冬也は準備を進める。するとLINEにメッセージが届く！送信相手は友希那とリサだ。

友希那『冬也、おはよう。今日は始業式でしょう？途中まで一緒に行きましょう』

リサ『ごめんねー。友希那が『どうしても一緒に行く』って聞かなくてさー、途中までは同じ道だし、一緒に行つてあげて？』

冬也『わかった、準備が出来たら俺の家の前で待つてくれ。』

そう送って冬也はスマホを閉じる。そしてしばらくした頃、家のインターホンが来客を告げた。

冬也「おはよう」

リサ「おはよう！」

友希那「おはよう、冬也」

冬也「それじゃあ……行こっか！」

その掛け声と共に、3人は学校への通学路を歩き始める。

リサ「へえ、それが花咲川の男子の制服？」

冬也「まあな」

友希那「イイじゃない、似合ってるわ」

冬也「ありがとな。そういう2人こそ、似合ってる」

リサ「……もう、ズルいよ／＼／」

友希那「……／／／」

冬也が2人の制服について褒めると、リサは小声で何かを呟きながら顔を赤らめていた。友希那は声も出ない程に顔を紅潮させていた。そんなやり取りを続けていると、羽丘女子学園と花咲川学園の道の分岐点に差し掛かった。

リサ「それじゃあ……またバンドでね！」

友希那「頑張りなさいよ」

冬也「ああ」

そう言つて冬也は友希那とリサと別れる。別れてから少しした時……。

冬也「しかし……やはり元女子校だからか、女の子が多いな……」

？「す、すみません！道を空けてくださーい！」

冬也「え？……うわっ！」

？「きゃっ！」

冬也は一人の女の子とぶつかってしまふ！その少女は後ろに倒れてしまった為、冬也はその少女に手を差し伸べる。

冬也「ごめんな、大丈夫か？」

？「あつ、はい、大丈夫です。ごめんなさい」

冬也「別に気にしてないよ、大した怪我にはなっていないし」

？「こら、香澄く！だから走るなって言っただろく！」

香澄と呼ばれた少女を、追いかけて来たもう一人の少女は短く窘める。香澄はその少女の名前を呼び、軽く謝罪をする。

香澄「ごめんごめん、それより早く行こう有咲く！」

有咲「だから走るなってのく！……すみませんでした、失礼します」

有咲と呼ばれた少女は冬也に軽く謝罪をすると、香澄を追いかけて行った。それを見て冬也は呟いた。

冬也「元気な子たちだな……あの娘たちも花咲川の生徒かな？」

そう呟いて冬也は花咲川学園へと通じる通学路を歩いて行った。始業時刻である8時30分に間に合って校舎に着くことが出来た。

冬也「……え、ええつと……俺のクラスは……」

？「あら？冬也じゃない」

冬也「おつ……紗夜か。おはよう、お前もここの生徒だったんだな」

紗夜「ええ。……そういう冬也こそ、どうして？」

冬也「実は昨日、理事長に会って来たんだよ。そして……まあ、ここへの編入を認められたって所かな」

冬也は紗夜に軽く事情を説明する。まだあの事は話せないと踏んだ冬也は、その事を隠しながら紗夜に説明する。

紗夜「成程……これからよろしく」

冬也「ああ」

そう言って2人はクラスを確認する。クラスは二人とも2年B組だった。確認した

2人は靴を靴箱に入れ、教室へと上履きを履いて向かう。

――――
「花咲川学園：2年B組教室」

中に入ると、一部の生徒が自分の席を見つけて座っていた。2人もそれに倣って席に座る。

紗夜「まさか……貴方の後ろとはね」

冬也「俺は一番前だ……しかも真ん中」

紗夜「よろしくね」

冬也「ああ」

紗夜と冬也は軽く挨拶を交わす。そして教卓から見て冬也の右隣に座っていた女の子が声を掛ける。

？「あ、あれ？……冬也……くん？」

冬也「もしかして……燐子？」

燐子「そうだよ……よろしくね、冬也くん」

冬也「よろしくな」

燐子とも軽く挨拶を交わす。そしてその後、担任の先生が入って来た。

？「えー……皆さん、おはようございます」

生徒全員『おはようございます』

？「私は今年度2年B組の担任となりました……宮野華音みやのかなと言います、1年間どうぞよろしくお願いします」

その声を皮切りに、生徒全員から拍手が巻き起こる。それを見た華音先生は手を叩いて指示を出す。

華音「はい！……私としては、皆さんの名前を早く覚えるために自己紹介をしてもらいたいのですが、まずは始業式に出て貰います。それでは廊下に並んでください！……あつ、私の目の前にいる君は教室に残っててね？」

冬也「分かりました。」

冬也を除く生徒全員は廊下に並び、列を乱すこと無く体育館へと向かって行く。それを見届けた華音先生は冬也に目を向ける。

華音「君には私と一緒に来て貰います、始業式で皆の前で挨拶をして貰うわ」
冬也「分かりました。」

—————

〔花咲川学園・体育館〕

始業式は滞り無くプログラム通り進み、理事長であるあかりの声で幕が下ろされようとしている。

あかり「ではこれにて始業式を閉式致します……と仰りたい所ですが、重要なお知らせを致します。……入場して頂きましょう、大空冬也くん」

冬也「はい」

舞台袖でスタンバイをしていた冬也が花咲川学園全校生徒の前に出る。少し緊張しながらも、冬也は言葉を発し始める。

冬也「皆さん、おはようございます。私はこの度、花咲川学園の共学化への第一歩……即ち、男子生徒第一号に任命されました、大空冬也です。2年間という短い期間ですが、仲良くして頂けると嬉しいです。どうかよろしくお願いします」

そう言った途端、周りから黄色い歓声が上がった。紗夜と燐子に関しては、ただただ微笑んでいたのだと言う。その微笑みには何か裏がありそうだと、気付くのはまた別の話である。

—————
教室に戻った冬也たちは、クラスで自己紹介を行っていた。そしてしばらくした頃……とんでもない生徒の名前を聞くことに！

華音「次の人……どうぞ」

？「はい！私は、花咲晴海と言います！皆さん、よろしく願います！」

明るく微笑むこの少女が、冬也の生活に波乱を巻き起こすことになる事をまだ誰も知らない。

再会……そして

「前回のBang Dream!」〔ver. 冬也〕

始業式での挨拶を終えた俺は、他の生徒と共に教室へと戻って簡単なLHRを受けている。先ず最初に行なわれたのは、担任の華音先生の強い要望から自己紹介を行なう事となった。……そしてしばらくした頃、俺はとんでもない生徒の名前を聞くことに！

「……」
華音「では、次の人どうぞ！」

「はい！私は、花咲晴海（はなさきはるみ）と言います！好きな食べ物はゴーヤチャップルーで、趣味は歌う事とピアノです！よろしくお願いします！」

元気よく自己紹介を終えた晴海は、作法良く席に着く。……そして後から気づいた事なのだが、なんと晴海は教卓から見て俺の左隣の人物だったのだ！俺の内心に驚きを隠せないまま、自己紹介が終わり……華音先生から簡単な連絡事項を伝えられたあと、俺たちは解散となった。

晴海「あつ、遅くなっちゃったけど……久しぶり！冬くん！」

冬也「お、おう……相変わらず元気だな、晴海は」

晴海「元気が無いよ？……まあいいや、これからは一緒だね！よろしくね！」

冬也「おう……」

俺が返答に困っていると、背後から突き刺さる様な眼差しが2つ入って来た。……小説を読んでくれている人は分かるだろうが、この視線は紗夜と燐子だ。

紗夜「冬也？」

燐子「こ、この人は……？」

冬也「紹介するな。俺のもう1人の幼馴染で……理事長であるあかり姉さんの娘の花咲晴海だ。」

紗夜／燐子『り、理事長の……娘!？』

俺が晴海の簡単な自己紹介をした時、紗夜と燐子の驚いた声が校舎中に木霊した。……二人ともバンドで鍛えてるからか、とてもうるさい……！

晴海「お、大袈裟だよ……でも、よろしくね？」

紗夜「ええ、こちらこそ」

燐子「よ、よろしくお願いします……」

晴海は紗夜と燐子と手を取り、固い握手を交わす。……そして何を思ったのか、晴海が俺に聞いてくる。

晴海「そう言えば……冬くん、今でもバンドはやってるの？」

冬也「ああ……その事か。いや、やってないが」

晴海「そうなんだ……」

冬也「あのバンドは俺が引つ越す際に、メンバー同士で考えて解散したんだ。……今でもギターは続けてるが、バンドはやってないな」

晴海「……好きだったんだけどな、冬くんのギター」

晴海が突然そのような言葉を発したので、紗夜と燐子がそれに食いつくかの様に晴海に詰め寄った！

紗夜「どういう事!？」

燐子「……ど、どういう事ですか?」

晴海「冬くんはね、一時期……あるバンドを組んでいたの。そのバンドを組んでいたメンバーは、当時の同級生達だった。……その名は『Symphony』」

紗夜／燐子「!？」

晴海から俺が以前組んでいたバンドの名前が挙げられた時、紗夜と燐子は驚いてお互いに顔を見合わせていた。少し落ち着いた頃に、俺の方へと目を向けた! 紗夜に関しては羨望の眼差しで……燐子に関しては驚愕の眼差しが突き刺さった。

紗夜「……私、知ってるわ。『Symphony』……それは同学校のメンバー、しかも同級生で組まれた5人組のロックバンド。彼らはその圧倒的なパフォーマンスで、世間を魅了していた……でもある日を境に解散したという噂が立つようになった……」

燐子「さ、紗夜……さん?」

紗夜「やはり……そういう事だったのね。これで全て合点が言ったわ。」

晴海「うん……紗夜っちの憧れたギタリストが、そこにいる……冬くんって事」

晴海が説明を終えると、紗夜は納得した様な顔で俺を見る。……もうその瞳には羨望の眼差しでは無く、真剣そのものの眼差しが俺に向けられた。

紗夜「この事を踏まえた上でお願いするわ……私に、ギターを教えてくださいませんかしら」
冬也「す、既にお前は俺の弟子だろう？……な、何故今更？」

紗夜「……私には、双子の妹がいるの。」

晴海「それって……日菜ちゃんの事？」

紗夜「ええ」

俺は紗夜から伝えられた言葉を一つ一つ聞き逃さない様にする。……簡単に纏めると、紗夜はずっと前からギターを始めたにも関わらず、妹の日菜は天賦の才能を活かして、姉である紗夜を軽々と越えてしまった……という事らしい。

紗夜「……だから、日菜には負けたくないの。勿論、他のバンドに負けるつもりは毛頭ないわ……でも日菜にはそれ以上に負けたくないの！」

冬也「お、お前……そんな事が……」

紗夜「引き受けてくれないかしら……」

冬也「……わ、わかった。もう一度言うけど、俺が過去に積み上げて来たもの全てをお前に叩き込む！やるからには全力だ！いいな！」

紗夜「ええ！」

俺がそう言うのと紗夜は元気よく返事を返した。それを見ていた晴海は声を発する。

晴海「ちよーつといい？」

冬也「何だ？」

晴海「……わ、私とバンドを組まない？」

バンドへのお誘い

晴海「……わ、私とバンドを組まない？」

冬也「バンド？」

俺は一瞬晴海から言われた事が理解出来ずにいた。……無理も無い、バンドを解散したのはついこの前だったのだから！それを関係無しに晴海は勧誘を続ける。

晴海「だーかーらー！お願い！私と一緒にバンドを組んで！」

紗夜「あ、ああ……貴女！一体どう言うつもりですか！／＼／＼」

燐子「そ、そうだよ！晴海ちゃん、どう言うつもりなの！？／＼／＼」

晴海の必死なお願いに顔を紅くしながら反抗する紗夜と燐子。……ま、まあ……：気持ちは分からなくもないぞ？そんな俺の気持ちを他所に話を進める。

晴海「……私、何時かあんなバンドをしたって思ってたんだ……ずっとずっと」

冬也「お、おう……」

晴海「元々はゆつきーのお父さんがやってた様なバンドがやりたかったんだけど、……私は冬くんのバンドに惹かれたんだ」

冬也「そ、そうなのか……」

静かに自分の想いを話し出す晴海。それを俺と紗夜に燐子の3人は静かに唯耳を傾けている。……さらに晴海は続ける。

晴海「……あつ、もちろん！誰の目に触れても恥ずかしく無い物にしようと考えたよ！?小さい頃からピアノを磨いて……歌の質も向上させて、何時かバンドを組みたいって思いはあったんだよ！ずっとずっと！」

冬也「……」

晴海「でも……やってくれる人は、皆無だった。私が誘っても『難しい』、『キツイ』の一点張り……仮にやってくれたとしても、結局はサポート止まり……私は、バンドを組んで大会に出たい！あわよくば優勝したい！」

紗夜「晴海さん……」

燐子「晴海ちゃん……」

晴海は思いの丈を全部俺たちにぶつける。……俺たち3人の返答を待たずして、晴海は想いを告げる。

晴海「無茶なお願いだっけ言うのは分かってるよ……でも、でもね！私はバンドがやりたい！……冬くん、私と一緒に、バンド……やろ？」ウルウル

冬也「……は、晴海……」

紗夜「どうするんですか？」

晴海が涙目になって懇願して来る。弟子である紗夜からは俺の決断を促している。……紗夜のギター指導もあるが……ええい！仕方ない！

晴海「ううっ……ヒクッ」ウルウル

冬也「……ったく、わかったよ」

晴海「……ほえ？」

冬也「やろうぜ、バンド。……でも、やるからには手は抜かないからな？」

晴海「ああ……っ！……うん！」ニコッ

俺がバンドへの参加を示すと、晴海の顔から一気に曇りが晴れて明るくなつたかの様に笑顔になつた。……全く、調子の良い奴め。俺は2人に向き直る。

冬也「……聞いての通りだ。……俺はお前たちの前に立ちはだかる。Roselliaが勝つには、俺たちを超えるしかない。覚悟は出来てるな？」

紗夜「ええ、もちろん！」

燐子「……絶対、負けません！」

冬也「その意気だ！……さてと、ギターのティーチングの事だけど、どうするんだ？」

紗夜「それは変わりなく、教鞭を揮ってもらおうと思うわ」

冬也「わかった。」

俺はそう言うと再び晴海に向き直る。……その後には俺は右手を差し出した。それはこれからの活動の手助けとなる事の意味を込めて。

冬也「よろしく頼むよ……リーダー」

晴海「……うん！任せといて！」

！
そう言つて晴海は俺の手を取つた。ここに俺の新しいバンド活動が始まりを告げた

「少しした後……」

それから少しした後、俺たち4人は音楽室へと来ていた。……事前に許可は取つてあるため、音楽室の鍵を開けて中に入る。目的はもちろん紗夜へのギター指導のためだ。

紗夜「……」

冬也「……」

俺と紗夜は黙々とギターの調節（チューニング）を行なっていく。時折、アンプや摘みも使いながら音の調節をして行く。丁度いい頃でタイミング良く調節が終わる。

紗夜「それじゃあ……頼むわ」

冬也「ああ。……先ずは」

俺はそう言うのと紗夜へのギター指導を行なっていく。時折、紗夜からの質問が出て来たが、それにはしつかりと対応して行く。その後には2曲ほど合わせてタイミングを確かめた。途中で晴海や燐子も入って貰い、ボーカルとキーボードと合わせるトレーニングも行なった。……そして辺りが夕焼けに染まってきた頃……。

—————
「花咲川学園：音楽室」〔4時間後〕

冬也「……今日の練習は終了」

紗夜「ありがとう。これからも頼むわね」

冬也「おうよ」

俺たちはそんな会話を交わす。……もちろん師弟関係は考えるつもりではあるが、同い年という事でそれを抜きにしている。……それを見ていた晴海と燐子は。

晴海「何だかあの二人……」

燐子「良いコンビですね」

そう言い合って2人で笑い合っていた。……とその時、紗夜のスマホに1本の連絡が

入る！

紗夜のスマホ♪♪♪

紗夜「何方でしょうか？」

紗夜は気になってスマホを確認する。するとそこには、友希那からのメッセージが届いていた！

友希那『紗夜、練習の方は上手くいつてるかしら？……そろそろ全員で合わせたいのだけれど、今からC i R C L Eに来れるかしら。待つてるわ』

紗夜『分かりました。今日は彼の他にもう1人お客さんを連れて来ます。調節をして待っていて下さい。』

そう送って紗夜はLINEを閉じる。確認してみると、時間は4時を差しており、普段ならRoseliaの練習に参加している頃合だった。

紗夜「そろそろ行きましようか」

冬也「ああ」

燐子「そうですね」

晴海「え、ええ？……どこ行くの？」

晴海が困った様に3人に問うと、燐子はその質問に答える。

燐子「ライブハウスです」

紗夜「貴女の事は念の為に伏せています。バンドを組むのであれば、参考に見てはいかがですか？……ですよね、マネージャー？」

冬也「ああ、そうだな」

晴海「え、ええ？」

そしてそんな晴海の胸中も知らずに俺たちは『CIRCLE』へと向かう。それに慌てて晴海は追いかけて行く。……この後にRoseliaの演奏を聞いて、晴海は衝撃を受けてしまうのはまた別の話である。

恐怖

「前回のBang Dream!」〔ver. 晴海〕

ついに迎えた花咲川学園の始業式！私も新しく2年生へと進級を迎えたその日、なんと唯一の男子生徒である冬くんが編入して来た！聞けばどうやら、冬くんはRoseliaのマネージャーと紗夜ちゃんのリコーのギター指導をしているらしく、私のお願いを聞き入れてくれるかどうか不安でした！……でも、私は諦めずに冬くんをバンドへと誘いました！その結果はなんと大成功！……負けないよ、Roselia！そう言えば……ゆつきーとリサチーはどうしてるんだろ？

「大空家：冬也の部屋」

冬也「……え、ええと……これは、どういう？」

俺は朝目が覚めると、見覚えの無い体勢になっていた。それを問おうとすると、俺の部屋のドアがゆっくり開かれる。そこに立っていたのは、軽くウェーブがかかった茶髪のパニーテールをしており、耳には星型のピアスをしているギャルっぽい幼馴染……り

サが立っていた。

リサ「おはよー☆……………どう？感想は」

冬也「一つ言わせろ……………最悪の目覚めだ」

リサ「友希那ーどう？冬也の温もりは」

冬也「ゆ、友希那？」

俺はそう言つて友希那を探そうとする。……………だが、手を自由に動かす事が出来なかつた。この事が関連してるのは、多分……………ここだろう。そう思つて俺はアソコに声を掛けた。

冬也「……………リサと組んで、何を企んでやがる。そろそろ拘束を解いてもらいたいんだがな……………友希那」

俺がそう言つたと布団の中からもぞもぞと動き出す音がした。……………そこに隠れていたのは、俺のもう1人の幼馴染である友希那だった。友希那は顔を紅潮させながら答えた。

友希那「無理な相談ね。こうでもしないと、貴方は私たちから離れて行くもの／＼」
冬也「じゃあどうすれば良いんだよ、この状況」

リサ「簡単だよー？……冬也は『あたしたちが居ないと、何も出来ない』って言うてくれるだけで♪」

その言葉を聞いたからか、無性に腹が立って来た。……何がとは流石に言わないが、言及すべき点があつた為、言わせてもらおう！

冬也「おいそれはどういう事だ」

友希那「簡単な事よ。貴方の上着ポケットに少し細工をしたのよ」

冬也「さ、細工!?!」

その言葉を聞いて俺は花咲川学園の制服の上着ポケットを調べた。……するとその中からは、正方形型の機械が出てきた。そんな俺の心情を読みとったかのように、リサが説明する。

リサ「あちやー……まつ、そろそろかな☆……それはね、盗聴器だよ？それで冬也の様子をチエツクさせて貰ったよ？」

冬也「おいおい……」

友希那「あの日、羽丘と花咲川の分岐点の所で、こつそり忍ばせたの。気づかなかつたのね、それも分かつてたわ」

冬也「じゃ、じゃあ……」

リサと友希那から発せられる言葉に、顔を青ざめていく俺。全てを頃合と見たリサが全ての種明かしをする。

リサ「全部……丸聞こえ♪あの『香澄』や『有咲』、『晴海』っていう女の子が……冬也に何をしたのか、冬也がどんな行動をとったのかも♪」

友希那「まあ……全ての解析は、リサの家にお邪魔して行なったのだけれど」

リサ「……これを踏まえた上で、聞くね？」

リサは意を決すると、俺の下に詰め寄った。それを見た友希那も同じ行動を取る。……そして、息を合わせてこう言った。

友希那／リサ 『私（あたし）たちを、ウラギルノ？……トウヤ……デキレバ、ウソツ
テイツテホシイナ……？』

冬也 「……！」

今まで経験した中で、この瞬間は『あつ、これ詰んだ』と思った瞬間だった。

説得

友希那／＼リサ『私（あたし）たちをウラギルノ……トウヤ……デキレバ、ウソツテイツ
テホシイナ……？』

冬也「……！」

片言になりながら濁った生気のない瞳で、詰め寄りながら言葉を出させようとする友希那とリサ。その様子に冬也は今まで経験した中で、感じた事の無いような悪寒を感じた！

冬也「わ、わわっ……わかった！全部話す！」

友希那「ええ、わかったわ」

そう言うのと友希那は未だに詰め寄ろうとしているリサを引き離し、適当な所に座らせる。そして冬也は口を開く。

冬也「……すまない。俺の行動が、2人を困惑させてしまったんだな。それは申し識ないと思う」

リサ「……」ニコニコ

冬也「だがな、俺が編入した学校は俺以外は全員女子……こんな状況で、『他の女子と関わるな』ってのは流石に無理だろ」

友希那「そうね」

冬也の必死な説得に眉一つピクリと動かさずに聞いている友希那と、常に笑顔ではないがその内には黒い物を纏っているリサ。冬也は続ける。

冬也「でもな？……友希那とリサの事が大切なんだよ、俺は」

友希那／リサ『……………！／／／／』

冬也「今更になって言う事かもしれないけどさ、お前らは俺にとって最高の幼馴染だよ。それはどうやっても変えられないと思う」

友希那「そ、そう……／／／／」

リサ「と、冬也……」

冬也の言葉が言い終わらないうちに、2人は冬也へと抱き着いた！

冬也「おおっ！ちよ、ちよっ！」

リサ「ありがとう……！」

友希那「私たちも貴方だけが、1番大切……私にとつては音楽と同じ位大切な……！」

気付かないうちに、2人の目からは涙が溢れ出ていた。それを塞ぎ止めるかのよう
に、冬也は言葉を発する。

冬也「ありがとう……こんな俺を想ってくれて。まだまだ鈍いかもしれないが、俺の
事……好きでいてくれるか？……そうでないと、上着ポケットに盗聴器なんて仕掛けな
いからな」

友希那「何を……今更、言わせてるのよ……」

リサ「アタシたちは冬也が好き……大好き！冬也の望む女の子になってみせる！」

友希那「わ、私だって……それは、変わらないわよ……！リサにも絶対に負けたりし
ないわ」

リサ「それを言うならアタシだって同じだよー？ 負けないからね、友希那！」
友希那「ええ」

冬也の事で一悶着あった後、友希那とリサは固く握手を取った。お互いに好きな相手は譲らないという意志の現れか、互いの手に力が入って行くのが伺えた。

冬也「あ、あの……メラメラと情熱的展開になっているところ悪いんだが、俺……報
告しなけりゃいけない事があつたんだわ」

友希那「？ 何かしら？」

リサ「……ま、まさか！」

冬也の突然の報告宣言に、疑問を抱える友希那。その時、リサは別の意味で捉えていたらしいが。

〔※ここからはリサの妄想が入ります。話の展開がとても急になっていますので、追いつける方のみここからはどうぞ。妄想シーンにお付き合い下さい※〕

—————

〔リサの妄想〕

冬也「ただいま」

リサ「お帰りー冬也♪ご飯にする？お風呂にする？それとも……ア・タ・シ？」

冬也「それじゃあ……ご飯で」

冬也がそう答えると、少々不満げな顔を浮かべながらもリサは冬也をリビングへと誘った。

リサ「それじゃあ、食べよっか♪」

冬也「ああ！」

リサ／冬也『いただきます』

お決まりの挨拶を口にして、並べられている色とりどりの料理に手を伸ばす。その中にはリサの得意な筑前煮もあり、顔を綻ばせながら食べていた。

リサ「どう？美味しい？」

冬也「美味い！この味付け……俺好みだ！」

リサ「ホント!?良かったー☆まだまだあるから、どんどん食べてね♪」

そう言つて2人は食べ進める。暫くして食べ終わり、お風呂も済ませてあとは寝るだけとなつた頃……。

リサ「ねえ……覚えてる？」

冬也「ん？」

リサ「アタシが冬也と付き合う事になつた切っ掛け♪」

冬也「ああ！……あの頃は、抱き着かれた後の告白だったからなく。ムードなんて考えられた物じゃなかつたな」

リサ「うう……それを言われると、弱るなあー」

突然の冬也からのカミングアウトに、バツが悪そうな顔をするリサ。でも、それをフオローするかの様に冬也は続ける。

冬也「でもあの出来事があつたから、俺はリサに告白できたんだ。それには変わりない」

リサ「……好きだよ、冬也♪」

冬也「俺もだ……リサ」

そう言つて2人はキスをする。最初はソフトだったものの、リサの舌が冬也の口内を犯し始める。それに負けじと冬也もやり返す。そして互いの吐息が熱を帯び始めてきた頃……。

リサ「冬也……アタシと、シたい？」

冬也「ああ、ヤラせてくれ……リサ。」

リサ「うん……シよ？」

その言葉を皮切りに、2人は布団へ移動する。そして冬也は耳に口を近づけて囁く。

冬也「好きだ……リサ。他の男なんかには、お前は絶対に渡さない。」

リサ「うん……アタシもだよ、冬也。他の女なんかには、冬也は絶対に渡さないから♪」

その言葉が引き金になり、2人は身体を交わらせあい……身も心も1つとなった……。

〔リサの妄想 END〕

リサ「……／＼」ボンツ！

冬也「あ、ありや？」

友希那「ちよつと〜？リサ〜？……ダメね、完全にトリップしているわ」

友希那がリサの様子をチエツクするが、リサは妄想世界にトリップしていたのか、元の世界に帰ってくるまで30分近くかかった。その後友希那がリサを連れて自宅へと送り届けたのは、また別の話である。

冬也「念の為に2人には、聞いて貰いたかったんだが……仕方ない。後日にするかな」

変化

友希那とリサの突然の襲来から数日経ち、普通の人なら誰もが嫌う月曜日がやって来た。……そんな中、この人物はと言うと……。

〔大空家：冬也の部屋〕

冬也「……んんっ」

何とも呑気な事にまだ就寝していた。……しかし、彼の平穩はある一つの音とともに崩れ去ってしまったのだ！

冬也のスマホ♪♪

(BGM：DAIGO『無限∞REBIRTH』)

冬也「……つたく、何だ？」

リサ『おはよー冬也☆一緒に学校行く？』

冬也「良いけど……朝早くに電話して来んなよ、迷惑だろ」

冬也が辛辣な言葉をリサに掛けると、言葉に詰まったかの様にリサが収まる。すると何か途切れ途切れに聞こえ始めた。

リサ『冬也は、アタシと話すの……イヤ？』ウルウル

冬也「うっ……ズルいぞ、そういうの」

リサ『えへへっ、ついね☆……でも、同じ様な手段で他の女にもやられて、籠絡された冬也に言われたくないな』

冬也「ぐうっ！……何故知ってる」

思わず突かれた急所に呻き声をあげる冬也。そんな心中を他所にリサは続ける。

リサ『アタシ、知ってるよ？……冬也、アタシたちに立ちふさがるんでしょ？バンドを組んで』

冬也「おいおい……それも、盗聴器から聞こえて来たって言うのかよ」

リサ『うん☆……言ったじゃん、筒抜けだって』

冬也「頼むから！……友希那には！……友希那には、黙っててくれないか？……アイ

ツ、怒ったら何しでかすか分かんないから！」

リサ『うーん、どうしよっかな〜？……友希那に伝えよっかな〜♪』

冬也「勘弁してくれ！」

冬也はリサに掛かりつきりで、この家にお客さんが来ていたのをすっかり忘れていたのだった！そして、その人物は非情にも……冬也の目の前で立ち止まった！

？「へえ、そうなの……」

冬也「友希那にバレたら、何されるか分かんないんだよ！だから……黙っててくれな
いか！」

リサ『分かった、分かったから……アタシからは言わないよ？』

冬也「ありがとな……ん？『アタシからは』って、どういう意味だ？」

友希那「……冬也」

いきなり友希那に名前を呼ばれた冬也。身体を震わせながら首を後ろへと回す。

……そこには、修羅が立っていた。

冬也「友希那……」

友希那「話は全て聞かせてもらったわ……どうして、その決断になったのか、確りと聞かせてもらおうわよ？」

リサ『それじゃ、また後でね♪』プツツ！

冬也「あつ！おい、ちよつ！」

電話の向こうのリサは冬也の状況を気にせず、電話を切る。それを確認した友希那は再開する。

友希那「……キカセテモラウワヨ、イイワネ？」

冬也「……はい」

凄い威圧感を放ちながら片言で迫った友希那に、冬也は成す術もなく、事情を説明する事にした。

—————

〔30分後〕

友希那「成程……言い分はわかったわ」

冬也「すまない……」

友希那「その役目を背負ったのなら、私は何も咎めないわ。……その役目を十二分に全うしなさい。あこには私から伝えておくわ。」

思つたよりも平和的な解決に、ホツと安堵の吐息を吐いた冬也。友希那はさらに続ける。

友希那「この事は、紗夜と燐子は先に知ってるのよね？」

冬也「ああ」

友希那「……だったら、止める理由は無いわ。頑張りなさい」

冬也「ありがとう」

すんなり矛を収めてくれた友希那に御礼を言う冬也。時間を見て、友希那は言う。

友希那「……そろそろ、行かなければ間に合わなくなるわね」

冬也「……！マジだ！」

時間は8時を示しており、30分後には始業のベルが鳴る頃まで来ていたのだった！それに気付いた冬也は、手早く準備を始めた。外にはリサも来ており、この数分の間にとんでもない程の体力を使う羽目になった冬也であった。

〔花咲川学園：2—B教室〕〔AM11:46〕

冬也「ど、どうなるかと思つた〜……」

晴海「あはは……だつて、来た時間が時間だもんね〜」

紗夜「全く、何の理由があつて始業時刻ギリギリに来るのです！」

燐子「まあまあ……冬也くんも、悪気があつた訳じゃないみたいですし……あつ、タオル使う？」

冬也「ありがと」

燐子「ああ……冬也くんが私のタオルを使つてくれる……／＼／＼」

冬也は燐子からタオルを受け取り、未だに出続ける汗を拭き始めた。その後も紗夜の細かなお説教は続き……、4校時も終わつて一息ついた頃。

冬也「やべつ……今日は弁当を作つてなかつたんだ。仕方ない、購買に行くか」

紗夜「どうかしたの？」

冬也「朝があんなバタバタだったからな……弁当を作り損ねたんだよ」

紗夜「分かりました。では私はちよつと片付けないと行けない事がありますので、それを済ませてから屋上に向かいます。」

そんな会話を交わした2人は、別々になる事にした。……一方、冬也にタオルを返してもらった燐子は、タオルに顔を埋めて顔を紅潮させていた……。

―――
〔花咲川学園：購買〕

あの後紗夜と別れた冬也は、購買へと足を伸ばしていた。金額は1000円で収まる物が多かったのだが、冬也は4つのパンを持ちながら、屋上へと向かっていた。すると……。

？「ええ!!? ……たまごサンド、売り切れたんですか!？」

冬也「ん？」

購買担当「すまないねえ、さっきの男子生徒に売った物で最後のよ」

？「そ、そうですか……」

その女子生徒はとぼとぼと帰って行く。それを見兼ねた冬也はその女子生徒に声を掛ける。

冬也「ちよつと、いいか？」

？「はい！……何ですか？」

その少女は身長はリサと同じ位で、髪を赤紫色のポニーテールにしている女の子だった。冬也はその女子生徒に購入したパンのうちの一つを手渡す。

冬也「良ければ……やるよ」

？「え？……いいんですか？」

冬也「ああ。どうやらそれを欲しかったみたいだしな」

？「あ、ありがとうございます！え、えつと……お名前は……」

冬也「俺は大空冬也、高等部の2年生だ。」

冬也が自己紹介を終えると、少女は息を落ち着けてから自らも自己紹介をする。

？「私は皆峰ルカと言います！高等部の1年生です！パンを譲ってもらってありがとうございます、うございます、冬也先輩！」

冬也「ああ、それじゃあな」

ルカ「ま、待って下さい！」

冬也「どうした？」

ルカ「良ければ良いんですが……お昼を一緒に食べませんか？」

課題？

冬也「悪い……遅くなった」

俺が屋上へと到着した頃には、燐子や紗夜に晴海が既に到着していた。……三人とも今から食べる所だったのか、お弁当の風呂敷が見える。

紗夜「いいえ、大丈夫よ」

燐子「それじゃあ……食べよ？」

晴海「あれ？そつちの娘は？」

晴海は俺の後ろにいる女の子に目を向けた。その女子生徒は、少し怯えながらも自己紹介をする。

ルカ「み、皆峰……ルカと言います！よ、よろしくお願いします！」

紗夜「皆峰……さんですね、よろしくお願いします。私は氷川紗夜です」

燐子「白金…燐子、です。よろしくお願いします」

晴海「私は花咲晴海、よろしく！」

ルカ「氷川先輩、白金先輩、花咲先輩……よろしくお願いします！」

冬也「それじゃあ……遅くなっても行けないし、食べるか」

俺の言葉を皮切りに、5人での昼食を取り始めた。

冬也「そう言えば、バンドの件はどうするんだ？」

晴海「あつ、うーんとね……」

紗夜「冬也、晴海さんは貴方に言われるまで何も考えてませんでした」

晴海「さ、紗夜っち！……そ、それは！」

俺が晴海にバンドの事について聞いた時、晴海は少し考える素振りを見せた。すると、紗夜から衝撃的な発言が聞こえた為、少し確認を取る。

冬也「……おい、晴海」

晴海「な、何……？冬くん……」

冬也「何も考えてないとはどういう事だ？」

晴海「い、いや……思い付かなかったんだよぉ」

晴海は涙ながらに俺に説明する。……全く、仕方ないな。

冬也「取り敢えず、先ずはメンバー集めだ。基本的にはバンドは2人以上いる事が最低条件、次に……バンド名。これは著作権に掛からないようにしなければならぬ。……これは分かるな？」

晴海「う、うん……」

冬也「取り敢えず今はこんな所か……こんなんじや、先が思いやられる」

俺がそうボヤいた時、今まで喋っていなかったルカが声を発する。

ルカ「あ、あの……少し、良いですか？」

冬也「どうかしたか？ルカ」

燐子（冬也くん……ナンデ、アノオンナノナマエヲ……？……ワタシダケジャ……ナ
イノ？）

俺がルカに聞くと、ルカは答え始める。……途中、燐子の様子がとんでもない事になっていたので、それに気づくことは出来なかった。

ルカ「私……冬也先輩の、お手伝いします！」

3人『ええ!?!』

冬也「と言うと？」

ルカ「私を、バンドのメンバーに加えて下さい！冬也先輩や花咲先輩と一緒にバンドがしたいんです！」

ルカはそう言いながら、俺たちにお願いをする。その目はまっすぐと俺たちに向けられており、決意の表情が見て取れる。……それを見た俺たちはルカに問う。

晴海「どうして……私たちのバンドのメンバーに、なろうと思ったの？」

ルカ「それは……先程、冬也先輩にパンを譲ってもらったんです。『その御礼に何かしたい』と思い、バンドのメンバーになろうと思いました！」

晴海「うん！いいね、それ！」

ルカ「ありがとうございます！」

冬也「じゃあ……俺からは2つ聞かせてくれ」

俺の言葉にルカは身構える。俺が少しジエスチャーをすると、体制を楽にしてくれた。それを見た俺は続ける。

冬也「まず一つ目……楽器は弾けるか？」

ルカ「はい！私は小さい頃から、キーボードを弾くのが趣味なんです！父親が趣味でキーボードをしていた影響から興味を持ちまして、今では父親以上にキーボードを弾く事ができます！」

冬也「そうか……じゃあ、最後にひとつ。……お前は、俺たちのバンドに全てを賭ける覚悟はあるか？」

俺は心の中で友希那に謝罪しながら、この言葉をルカに伝えた。するとルカが顔を下に向けたので、機嫌を伺おうとした所、途端に元気になり、俺に言ってきた。

ルカ「か、カツコイイです！私、感動しました！こんな私で良ければ、バンドに加入

させて下さい！」

冬也「よろしく頼む……ルカ」

晴海「よろしく、ルカちゃん！」

ルカ「は、はい！」

これでバンドのメンバーは3人となった！晴海も嬉しそうだし、これで良かったかな？

—————

〔羽丘女子学園：教室〕

友希那「は……ハックション！」

リサ「友希那く、どうしたの〜？」

友希那「今、私の噂をされてたような気がするわ……」

友希那は謎の気配に身震いを感じていた。それを見たりサはこう返す。

リサ「んー……大丈夫じゃない？それに、噂してるのは冬也かもよ？」

友希那「と、冬也が……？……成程、それも有り得るわね」

リサ「ねっ、朝の奴って……演技？」

リサが友希那に今朝の事を聞くと、友希那は満足そうに答え始める。

友希那「ええ……でも、一部は本心よ？あまり冬也を惑わせてもいけないし」

リサ「友希那、さっすが！分かってる〜♪」

友希那「ありがとう。……何れ、どうなろうと冬也は私たちのモノになるわ、だったら泳がせてみてもイイじゃない？」

リサ「そうだね、紗夜や燐子たちには悪いけど……」

友希那／リサ「トウヤハゼツタイニワタサナイ……マツテテネ、トウヤ」

—————

〔花咲川学園：屋上〕

冬也「……！」ブルッ！

晴海「？どうかした？」

冬也「い、いや……何でもない」

ついさつきまで考えていた幼馴染に、そのような感情を向けられているとは露ほども

思わない冬也であつた。……一方、こつちの方では……。

紗夜（……これからの対応、もう少し考えましようか……）

燐子（冬也くんは……私の、下に来るんだから……。ゆ、友希那さんや、リサさんには……負けません……）

近くににいる者たちからも、そんな愛情を向けられているとはこの時の冬也には知る由もなかった。徐々に徐々にではあるものの……1人の男の子を巡って、青薔薇の女神たちの仁義なき戦いが始まろうとしていた……。

バンド名を決めろ!

「お昼を済ませた冬也たち5人は、午後の授業に臨んでいた。……そして暫くした後……。」

「花咲川学園：2年B組 教室」

華音「今後の日程は、前に掲示している通りです。このクラスとしての最初の行事は《文化祭》になります! 皆さん、楽しい文化祭になる様に精一杯頑張りましょう! それでは……学級委員長、号令をお願いします」

紗夜「起立」

学級委員長である紗夜の号令を受けて、挨拶を済ませる。そして放課後になった途端、晴海が声を掛ける。

晴海「活動を始めるよ! 冬くん!」

冬也「わかった。……すまないな、紗夜。先に《Circle》へと行っててくれるか? 多分友希那たちが来てると思うから」

紗夜「……分かりました、ではまた後で。私は先ず弓道部の方に顔を出して来ます」
そう言つて紗夜は教室から出て行く。それを見た燐子は、紗夜の後に続いて行く。

冬也「さてと……場所を少し移そうか」

晴海「うん！……その前にルカちゃんを呼んでくるね〜！」

――――
「花咲川学園：音楽室」

晴海「連れて来たよ〜！」

ルカ「よろしくお願いします！」

冬也「おう。待つてたぞ？」

3人は空いてる椅子に腰を掛ける。それを見計らつて、晴海が話し始める。

晴海「では改めて！これより……バンド活動を始めます！」

ルカ「わーい！」パチパチパチ

冬也「単刀直入に聞くが……バンド活動をするに中つて、目標はどうする？」

ルカ「それは勿論……全てのバンドの、頂点に立つ事ですよね!」
冬也「そうだな。次にバンド名だが……考えてあるのか、晴海?」

バンド名を考えてあるのかという問いを晴海に投げ掛ける冬也。……すると、少しの感覚を空けて、晴海が明後日の方向を向きだした。

冬也「お、おいおい……まさか……」

晴海「……てへっ」コツン

冬也／ルカ『はぁー……』

晴海が『ごめんね?』と言わんばかりの顔をして、拳を頭に軽く当てたので、それを見た冬也とルカは盛大に溜息を吐いたのだった。

冬也「仕方ない……今日はバンド名を決めるぞ」

晴海／ルカ『賛成!』

冬也「先ずは……『これっ!』って言うキーワードは無いか?」

少しのキーワードを探す為に、頭を抱えてしまう3人であった。

「暫くして……」

晴海「うわぁーん……何も思いつかないよぉー！どうしてこういう時に、何にも思いつかないのぉー！」

ルカ「……はっ！私、寝落ちしそうでした！」

冬也「まあ……簡単には思いつかないわな」

3人揃いも揃って、思い付いていないのであった。

？「すみません……そろそろ最終下校時刻ですよ」

冬也「あつ……すみません。ほら、行くぞ」

晴海「わかったく……すみません」

？「こんなに一生懸命……何かするんですか？」

不意に現れた女性に質問された冬也は、順序を立てて1から説明する。

? 「へえ〜……バンドを結成するんですね。頑張ってくださいね。……自己紹介がまだでしたね、私は鰐部七菜わにべななと言います。よろしくお願いします」

冬也 「ご丁寧にも……俺は大空冬也です」

七菜 「よろしくお願いします。それじゃあ……鍵を閉めちゃいますね」

冬也 「ほら! 早く出るぞ!」

2人 「すみませんでした〜!」

七菜が音楽室の鍵を閉めようとしたら、冬也は2人に声を掛けて外へと向かって行った。その様子を茫然とした様子で見ていた七菜はと言うと。

七菜 「大空冬也……あの『Symphony』のギタリスト……まさか、こんな所で会えるなんて……!」

「花咲川学園・校庭」

ルカ 「それじゃあ……私はこっちなので!」

晴海 「またね〜!」

冬也 「気を付けて帰れよ〜?」

ルカは冬也たちとは反対方向へと走って行った。それを見届けた冬也と晴海は歩き出す。

晴海「今日中には決まらなかったね……」

冬也「仕方ないさ、また日を改めて考えよう」

そう言い合いながら通学路を歩いて行く2人。少しした後、ライブハウスから出てくる人と鉢合わせする事に！

？「あら？冬也じゃない」

冬也「友希那……まだ練習してたのか？」

友希那「いいえ、今終わった所よ」

友希那は視線を背後に促す。すると、そこにはギターやベースをケースに戻してアンブなどの機材を返却しようとしているRoseliaのメンバーがいた。

リサ「おつ、冬也ー!」

冬也「よう、リサ」

紗夜「遅かったですね……何かあったのですか?」

紗夜から遅れた理由を聞かれた冬也は、先程まで七菜にしていた説明を紗夜にも行なった。……すると、紗夜はこう答えた。

紗夜「でしたら……私もお手伝いします。勿論、バンドが本格的に動き出すまでです
が」

冬也「ありがとな、紗夜」

紗夜「い、いえ……これくらいはお安い御用です」

冬也が紗夜にお礼を言うと、少し口籠りながらも紗夜は答える。その顔は少し紅くなっていたが……。

—————

「大空家：冬也の部屋」

冬也「どうするかな……」

冬也は自室で一人、バンド名を何にするのか深刻に考えていた。結局その日は何も思いつかず、布団へと意識を預けた。

—————

「花咲家：リビング」

晴海「ねえねえお母さ〜ん」

あかり「どうしたの？」

晴海「バンド名……どうしたらいいかな〜？」

あかり「うーん……そうね〜……『花』をモチーフにしてみるのはどうかしら？」

晴海「『花』……かあ〜」

冬也とルカの知らないところで、晴海が凄く考え込んでいたのはまた別の話……。

—————

「花咲川学園：正面玄関」〔翌日〕

冬也／ルカ『おおー』

晴海「ねっ！良いでしょ？」

晴海が自信満々に掲げている紙には『Flowerlight』と描かれていた。それを見せた晴海は由来を語り出す。

晴海「このバンド名には……『花』と『喜び』という意味があつて、冬くんが再びバンドを始める事の喜びと私の名前にある『花』から取ったんだけど……どう？」

冬也「それで文句は無い……ルカはどうだ？」

ルカ「問題ありません！」

晴海「よし！じゃあ……これから私たちは、『Flowerlight』だ！活動開始だよ！」

新たな仲間

晴海「ふえ〜……疲れたよ〜」

冬也「そう言うなよ」

晴海からバンド名が『Flou w l i g h t』と知らされてから暫くした後、報せてきた張本人である晴海と言えば……お察しの通りである。それを見た俺は、現在少し呆れてすらいる。

華音「それでは……来る文化祭に向けて、先ずは実行委員を決めたいと思います。では……『我こそは!』という人は居ますか?」

晴海が退屈そうにしているそんな中、華音先生は文化祭の実行委員を選出する為に動き出した。華音先生が投げ掛けた途端、周りのメンバーは少し考え始めた。

晴海「どうする?やる?」

冬也「お前がやりたいなら、それで良いが……大丈夫か？」

晴海「ううっ……まだ自信ないかなあ〜」

そう言つて晴海は正面を向いて顔を俯いた。……すると、ある一人の生徒が提案をす
る！その人物はピンク色の髪をセミロングにした女の子だった！

生徒「はい！提案があります！」

華音「はい……丸山さん、どうかしましたか？」

丸山「私……実行委員は大空くんが良いと思います！」

何と『丸山』と呼ばれた女子生徒は、俺を推薦してきた！……大丈夫なのか、俺で？
視線を周りに向けると、クラスメイト全員の眼差しが期待を孕みながら、俺に向けられ
ていた。……はあ、仕方ない。

冬也「華音先生、俺……実行委員をやりませう」

華音「分かりました！皆さんもそれで良いですか？」

冬也を除く全員『はい！』

満場一致の雰囲気となり、俺は文化祭の実行委員を務める事になった。その後、華音先生から声が掛かる。

華音「では……後の事は、実行委員長である大空くんにお任せします。よろしくね！」
冬也「分かりました」

そう言つて俺は教卓に立つ。一方で華音先生はと言うと、椅子を持ってドアの前まで行き、パイプ椅子を拵げて腰掛けた。それを見た俺は話し始める。

冬也「文化祭の実行委員となった、大空冬也だ。よろしく頼む」

晴海「よっ！カッコイイよ、冬くん！」

冬也「晴海のご冗談はさて置き、手元にある資料に拠れば、実行委員はあと一人決める事ができるみたいだ……もう一人やると言う人は？」

生徒A「私がやる！大空くんのサポートをやりたい！」

生徒B「私も！」

ある一人の生徒が提案をする！それに続いて他の生徒も挙手をし出したので、クラス全体に険悪なムードが漂い始めた！

丸山「ちよ、ちよつと……みんな!？」

晴海「……だつたら私もやる！冬くんをサポートなら、私に任せて！」

紗夜「私もやります。彼は私たちのバンドの仲間ですので」

燐子「……わ、私も……やります……！」

華音「大空くん、人気だね〜！」

次々に立候補が上がる中、見守っていた華音先生はと言うと、ヤケにニヤついた顔でこの状況を見守っていた……。助けて下さいよ！

—————

『ライブハウス『Circle』』

まりな「あつはは！大変だったね〜」

冬也「そう言わないで下さいよ、中々に骨が折れるんすから……」

あの状況を鎮めた俺は、晴海とルカを連れてライブハウスへと来ていた。帰る際にク

ラス全体から黄色い歓声が上がっていたが、そんなのを気にせず走って来たために、顔中からは汗が吹き出ている。

まりな「それより……あの二人は大丈夫なの？」

冬也「はい。2人には少し待っておくように言ってるので」

まりな「そうなんだ」

冬也「はい」

まりな「あつ……ねえ、ここでバイトしてみる気は無い？」

冬也「え？」

突然まりなさんから言われたのは、バイトの話題だった。

冬也「どうしたんですか、いきなり」

まりな「いやあく実はね、この前のやり取りを聞いてさ、楽器経験がある冬也くんをここで雇いたいって思ってたのよ」

冬也「それって……どこまで聴きました？」

まりな「うーん……かつてバンドを組んでたって所だったかな」

冬也「……それって誰から？」

まりな「うーんとね、晴海ちゃんから？」

おいおい……晴海にはまた後日に『ダイスキなモノ』を与えるのでしょうか。本人も『ダイスキなモノ』をね？

冬也「分かりました。やります」

まりな「ありがと〜！それじゃあ……取り敢えずシフトを組んでおくね！先ずはやり方の説明から！」

俺はまりなさんからバイトのやり方を、みっちり教えて貰った。後に友希那たちが来て、黒いオーラが漂っているのを感じ取り、少し蒸し暑くなった受付がみるみる冷えていくのが分かった。

――――
〔友希那 side〕

友希那「……………」

リサ「……………」

紗夜「……………」

燐子「……………」

私たちはスタジオに入ると、直ぐに準備を始めたわ。全く……………冬也ハ私ノモノナノニ……………アンナニ密着シチャツテ、あのメス……………ドウシテクレヨウカシラ……………?なんて思っている、あこが声を掛けて来た。

あこ「友希那さん、リサ姉、紗夜さん、りんりん……………顔が怖いですよ?」

友希那「あら、ごめんなさい……………少し考え事をしていたの」

リサ「大丈夫だよー♪」

紗夜「心配してくれてありがとうございます」

燐子「ありがとうね、あこちゃん……………」

あこ「大丈夫!」

友希那「それじゃあ……………始めるわよ」

私たちは演奏を始めたわ。……………もう少し接し方を考え直す必要性があるわね。ミテナサイヨ……………ワタシノトウヤヲウバウヤツハゼツタイニユルサナイワ……………タトエ、ソレ

ガリサデアッタトシテモ……。

〔友希那 side out〕

〔花咲川学園・玄関〕〔翌日〕

冬也「ふうく……大変だった」

晴海「今日も頑張ろ？」

翌日、俺と晴海はいつも通り登校していた。……すると、掲示板の前に誰かが立っていた！

？「もしかして……バンドメンバーを募集してるのって……君たち？」

冬也「あ、ああ……そうだけど」

晴海「あなたは？」

？「私は白木すすずって言うんだく……よろしくね！君たちの名前はなんて言うの？」

出会った途端に馴れ馴れしい口調で、白木は自己紹介を終えた。白木は長い白髪をハーファアップにしており、毛先がくるんくるんになっている。体型は標準型で胸は晴海

よりも大きい。……いきなりの馴れ馴れしい口調での対応に圧倒された俺たちは自己紹介をする。終わった後に、白木はこう頼み込んできた！

白木「私を……バンドのメンバーに……してくれない？」

新参者の奏でる音色

早朝の白木すずによる突然の事態から、数時間後が経過した頃……冬也たちは何時も
の様に学業へと取り組んでいた。……そして時は流れて。

〔放課後〕

冬也「うわっ……これはすげえ量の書類だな」

？「仕方ないよ……この量を私たちで処理しないといけないんだから」

冬也「ありがとな、ええと……」

途端に名前が思い出せず、何とか思い出そうと頭を捻る冬也。それを見た少女は自身
の名を語る。

？「私は水瀬愛姫だよ……改めまして、よろしく♪」

冬也「水瀬か……よろしくな」

愛姫「じゃあ教室に戻ろっか」

をした。

冬也「紹介するな。俺と一緒に文化祭の実行委員をしている……水瀬愛姫だ」

愛姫「水瀬愛姫です！よろしくお願いします♪」

愛姫が自己紹介を終えた後、晴海たちも続いて自己紹介をする。

冬也「それじゃあ……すずは居るか？」

すず「ん？呼んだ？」

冬也「取り敢えず……先ずはお前の实力を見せてくれ。出来るか？」

すず「うん！何時でもOK！」

そう言うとすずはベースを担いで、準備を整え始めた。それを見た愛姫は驚いており、冬也がそれに一言説明を加える。

愛姫「あ、あれは？」

冬也「言つてなかったな……今日は新メンバーの实力を見る予定だ。お前もやるか

そして晴海は同じような講評をすずにも述べる。……そして数分後。

晴海「ちよつと聞いて〜」

冬也「ん？」

晴海「さっきの結果を発表するよ！」

2人は互いを見合わせたかと思うと、ゴクリと唾を飲み込む。そして晴海は結果を述べる。

晴海「結果は……二人とも合格！これからよろしくね！」

2人『ありがとうございます！』

晴海「そろそろ時間だし……帰ろっか！」

その言葉を皮切りに、5人は荷物を纏めて音楽室の施錠をしてその場を後にする。

「ライブハウス《Circle》」

友希那／リサ／燐子／紗夜『!!!!!!』

あこ「え？ええ？どうしたんですか？」

4人『また冬也（君）の周囲にメスが増えた……駆除を急がなきゃ……』

冬也の気配を感じ取って、友希那たち4名の背後から黒き禍々しい憎悪のオーラがこれでもかと噴き出していた。一方でそれを見たあこは肩を震わせて怯えていた。

「氷川家：紗夜の部屋」

紗夜「ドウヤツテ冬也ノ周囲ニ居ル雌ヲ、一匹残ラズ駆除シヨウカシラ……？」

？「おねーちゃん！」ダツ！

紗夜「もう、日菜！部屋に入る時はノックをする様にとあれ程！」

そう言う紗夜の注意も聞かずに、紗夜へと抱き着いている人物こそ……彼女の妹である《氷川 日菜》である。日菜は紗夜を見据えると、ある疑問をぶつけた。

日菜「さつきからブツブツ言ってたけど……どうしたの？」

紗夜「な、なんでもないわよ」

日菜「嘘だ〜……だって目が泳いでるもん！普段のおねーちゃんはそんな事しないもん！」

紗夜「……仕方ないわね、実は」

妹の発言にうつと詰まらせた紗夜はこの事を日菜に全て伝えた。すると、日菜は衝撃的な言葉を口にする！

日菜「はっはーん……おねーちゃん、その冬也って言う人に《恋》をしてるんだ〜」

紗夜「んなっ！私は《恋》など……！！／／／／」

日菜「じゃあその照れてる顔は、どう説明するの〜？おねーちゃん？」ニヤニヤ

紗夜「ううっ……………」

妹である日菜に玩ばれたのが余程癪に触ったのか、言葉を詰まらせて下を向く紗夜。少し落ち着いてから話し始める。

日菜「なら……その人をデートに誘っちゃえばいいじゃん！」

紗夜「なっ……………」

日菜「おねーちゃん、その人の事好きなんでしょー？ だったら、迷う事ないよ！ ほらよく言うじゃん！ 《当たって砕けろ》とか《フアイトだよ！》（？、ω、）？ 《》とか！」

紗夜「（何なのこれ……何処そのスクールアイドルがそれをやると可愛く見えるけど、今の日菜からは嫌味として感じられるわね）」

妹が姉を励ましている最中に、失礼にも姉の方は憤怒のオーラが漂っていた。それを見た日菜は冷や汗をかいていた……。

日菜「おねーちゃん？ なんか怒ってる？」

紗夜「怒るわけじゃないじゃないですか……だって、貴女は私の可愛い妹なんですから……フフフフ」

日菜「ひいっ！」

そしてその後日菜は激怒状態の紗夜に、長時間正座の状態でこつ酷く叱られたのだった。日菜を叱った後の紗夜の顔は、それとは別に赤面していたが。

セツトリストを考えろ！

「ライブハウス『Circle』」

冬也「OK！今日はここまでだ！」

晴海「水分補給しっかり！」

冬也たちは来る文化祭の為に、ライブハウスを使って練習をしていた。メンバーの瞳には確固たる信念があるが、その裏には拭いたくなる程の汗が滲んでいた。

すず「ふうー……私はまだまだ出来るよ！」

ルカ「すずちゃん？やる気があるのは良いけど、オーバーワークはダメだよ？」

愛姫「文化祭への出場エントリーは済ませたから……あとはセトリと練習だけだよ」

実はこの数日間で、冬也と愛姫は『Followlight』のメンバーとしての、ステージへの参加の手続きを済ませていたのだ。

晴海「ありがとね!……あとはクラスの方だけだ。」

冬也「……いくら俺が料理ができるからって、アレは少し考え物だったぞ」

愛姫「でも、決まってしまったのは……仕方ないからね」

結論から行けば、晴海たち3人のクラスは『メイド&執事喫茶』をする事になった。……ここまでは良いのだ。しかし、起こってしまった問題というのは、『裏方の仕事をこなせるのが冬也と燐子と愛姫の3人だけ』という物だったのだ。

ルカ「大丈夫です!お客様が少なくなっちゃって、私は遊びに来ますから!」

晴海「少ないの確定!?!」

すず「晴海ちゃんなら、ちゃんと出来るよ!私は信じてる!」

晴海「それ、どう意味!?!……冬くーん!」

後輩2人に弄られた晴海が、勢い良く冬也へ抱き付こうとしたが、それを難なく冬也はヒョイとかわす。なので、あえなく失敗してしまったのだ。

冬也「そんな事よりも……決めなきや行けない事があるだろ」

晴海「わ、分かったよお……まずは文化祭で披露する為のセットリストを考えようか！」

5人『うーん……』

晴海が内容を提示した瞬間、5人は真剣に悩み始めた。……するとスタジオ内の扉が開いた！外から一人の少女が入って来る。

？「何かお困りかしら？」

冬也／晴海『友希那（ゆっきー）！』

友希那「久しぶりね、晴海。……話は聞かせてもらったわ。私で良ければ協力するわ」

晴海「ありがとう、ゆっきー！」

友希那「礼はいらないわ。私が望むのは、他を圧倒する完璧なライブ……その為には、必要な事は全てするわ」

なんとスタジオ内に入って来たのは、友希那だった！練習した後なのか、額には少し汗が滲んでいた。そしてその近くにはリサも一緒に立っていた。

友希那「なるほどね……これはどうかしら？」

冬也「それを出すか。……これはどうだ？」

晴海「ス、スゴい……」

愛姫「友希那さんが来るだけで、雰囲気ガラリと変わった……」

冬也と友希那がセットリストを組んでいる最中、蚊帳の外に追いやられた4人は、唯々ポカーンと口を開けて立ち尽くしていた……。暫くして、セットリストはこの様になった。

〈セットリスト〉() は歌い手

- ① 《魂のルフラン》(高橋洋子)
- ② 《空想メソロギヅ》(妖精帝國)
- ③ 《宙船》(TOKIO)
- ④ 《紅蓮の弓矢》(Linked Horizon)
- ⑤ 《Rising Hope》(LiSA)
- ⑥ 《Believe in Myself》(EDGE of LIFE)

冬也「よし……これで行くか」

友希那「そうね。このセトリで行けば、間違いない良いライブが出来るわ？」
「どれどれ？」

晴海「リ、リサちー！」

リサ「やつほー☆晴海、久しぶりー」

セツトリストが書かれた紙を、マジマジと覗き込むリサ。すると、何を思い立ったのか、少し手直しをし始めた！

友希那「リ、リサ!？」

冬也「な、何してんだよ！」

リサ「んー？何だかこのセトリだと、少し暗いんだよね……だから、こんな感じに！」

〈セツトリスト【修正案】〉

- ① 《FEED THE FIRE》(coldrain)
② 《エガオノマホウ》(MAGIC PARTY)
③ 《空想メソロギヤ》(妖精帝國)

④ 《Rising Hope》(LISA)

⑤ 《世界は恋に落ちている》(CHICO with HoneyWorks)

⑥ 《Believe in Myself》(EDGE of LIFE)

リサ「こんな感じで……どう? ダークな曲も良いけど、ポップで明るい曲も取り入れて!」

友希那「……確かにそれは一理あるわね」

冬也「……あまり考えつかなかった」

リサ「でつしよー? ライブって言うのは、人を感動させるのが目的ではあるけど、楽しませる一面も持つからね」

そう言ってリサは2人を諭す。互いに納得したのか、2人は終始無言で立ち尽くしていたのだった……。

—————

【街中】〔午後7:00〕

冬也「しかし、意外だったな……リサにあんな才能があったなんて」

リサ「嬉しいな……でもアタシは、唯々自然にしていただけだよ」

友希那「いいえ、謙遜する事でもないわ。実際にリサが手を加えてくれたお陰で、雰囲気も変わったわ」

リサ「改めて言われると……何だか照れるな」

ライブハウスからの帰り道、冬也たち3人は家までの道のりを歩いていた。少しした後、リサのスマホが音を立てて鳴り始める！

リサ「あつ……ちよつと外すね？」

冬也「おう」

友希那「ええ、構わないわ」

そう言つてリサは2人から離れる。……すると、リサの下に重要な報せが届く！

リサ「……うっそ」

美咲『ヤッホー、リサ♪もしかして……今は愛しの彼と帰ってる頃かしら？お母さんたちね、仕事の関係で今日は一晩丸々帰れそうに無いのよ。なので、今日は冬也君のお家にお世話になっちゃって！』

P. S. 冬也君、リサの事をよろしくね?あと、……結婚する事になったら、早目に伝えてね?』

リサ「な、何言ってるの……お母さん!」

しばらく経って戻って来たリサの顔は、冬也の顔をマトモに見られない程紅潮していた。それを見て友希那は軽く嫉妬しており、冬也は何とも言えないような苦笑いを浮かべていた。

――――
【大空家：冬也の部屋】

リサ「なんかゴメンねー勢いで泊まっちゃって」

冬也「大丈夫だ。一人で居るよりも、誰かと一緒に居る方が良い」

リサ「良かったー」

そう言っただけでリサは冬也へと抱き着く。冬也はそれを受け止めきれず、布団へと倒れ込んでしまふ!冬也の布団から音がしないでもなかったが、今の冬也にそれを気にする余裕はなかったのだ。

冬也「……リサ」

リサ「今日、バンドメンバーと話してたでしょ？しかも女の子」

冬也「おお」

リサ「アレを見てさー……少しなんだけど、胸の中に黒いモヤモヤした気持ちがあるんだ。今回の場合は特に」

この小説を読んでくれている人は察せるだろうが、リサは冬也の事が好きなのである。だから、同じバンドメンバーの女の子と話していても、リサは少し嫉妬しやすいのだ。

リサ「……不足した、冬也成分……補給させて」

冬也「……分かった」

リサが抱き着いたまま、そう要求してきたので、冬也は頭を撫でながら、リサを抱き締めていた。……すると、次の瞬間……リサはとんでもない行動に出た！

リサ「……冬也」

冬也「何だ……リサ」チュッ

冬也がそう言った瞬間、リサは冬也の唇へとキスを落とした。最初は優しい物だったが、時間が経つにつれて、それは激しい物となって行った!

リサ「冬也……冬也……ダイスキ……」

冬也「どうしたんだよ、リサ……」

リサ「アタシのモノにしなきゃ……冬也が誰かに取られる前に……」

そう言つてリサは行為を激化して行った。……そして、翌日を迎えた頃、冬也は昨夜あつた事を思い出すのに、小一時間を必要としてしまうのだった。

リサ「冬也ハ誰ニモ渡さない……覚悟シテナヨ?冬也ノ隣ニ適シテルノハ、アタシだつて、教えてアゲルカラネ?／＼／」

その一方では、瞳を暗く濁らせたリサが、頬を紅潮させながら、そんな事を言つていたのだつた……。

番外編《Side Story》

【誕生日回】陽だまりの少女の生まれた日

〔大空家：冬也の部屋〕〔8月25日 AM6：30〕

新たに『F l o w l i g h t』というバンドを結成してから、3カ月が過ぎたこの頃……この人物はと言うと。

冬也「……」

規則正しい寝息を立てて寝ていた。……と、そこに一通の着信が届く！

冬也のスマホ🎵🎵🎵

(BGM：DAIGO『無限∞REBIRTH』)

冬也「誰だよ……はい」

リサ『おっはよー冬也☆今日はアタシとデートしよ？』

冬也「何だよ、藪から棒に……どうしてだ？」

リサ『良いでしょ？今日はバンドの練習、無いんでしょ？』

リサから今日のバンドの練習について聞かれると、冬也は言葉を詰まらせたように唸る。少しの間を空けてから冬也は答える。

冬也「無いけど………」

リサ『でしょ？今日はRoseliaの練習も、バイトも無いからさ……デートしよ？』

冬也「デートって、ただ出掛けるだけだろ……まあやる事も無いし、良いよ。付き合ってる」

リサ『ホント？やったー！』

冬也（今日は妙にテンションが高いなー、何かいい事でもあったか？）

そう思いながら、冬也は出掛ける準備を整える。そして朝食も済ませて家へと向かう。

—————

「今井家：リサの部屋」〔リサ side〕

リサ「こつちで行こうかな？ いや、こつちかな？……ううつ、決まらないな」

冬也をデートに誘ったアタシは、鏡を見ながら出掛ける為の服を決めていた。冬也が戻って来て初めての誕生日だからね……楽しむぞー！

リサ「こつちがいいかな！」（・ーωー）σ ピンポーン♪

リサ母『リサー、お客さんよ〜？』

リサ「分かったー！」

アタシは準備を少しストップさせて、来客の対応へと出る事にした。………そして、そこに居たのは！

「リビング」

冬也「よう、リサ」

リサ「冬也……おはよ♪」

アタシの家にやって来た人物は、なんと冬也だった！電話をして……準備してから、1時間しか経ってないよ!？と思つたら、お母さんが説明してくれた。

リサ母「貴女の事を想つて、早めに来てくれたのよ?……ごめんね?うちの娘の為に……」

冬也「いえいえ……これくらいはどうつて事無いですよ、美咲さん」

美咲「本当に律儀ね……いつその事、リサを娶つてくれないかしら」

冬也が……アタシの事を想つて?……何だか、それつて照れるなあ♪……と思つたら、お母さんが何やらブツブツ言つてるんだけど?

美咲「リサ、朝ご飯食べてないでしょ?顔と手を洗つて来なさい。……冬也君も如何かしら?」

冬也「美咲さんの料理は美味しいですけど……俺は家で済ませて来ましたので」

美咲「あらあら……褒めるのが上手いわね」

そんなやり取りを背に受けながら、アタシは洗面台へと向かつて行つた。……そして

朝食を終えて、暫くした頃……。

「街中」

冬也「そう言えば……出かける、とは言ったものの……具体的にはどうするんだ？」
リサ「え？……あつ、うん！先ずは……シヨツピングモールに行こつ！服も丁度買いたかつたし」

冬也「わかつた」

「シヨツピングモール」

そんなこんなでアタシたちはシヨツピングモールの中にある、某有名な洋服屋さんに来ていた。ここはメンズやレディースも揃っているの、洋服を探すにはうつつけ場所なんだよね。

リサ「うーん……こつちがいいかな？」

冬也「……」

アタシは服を選んでるけど、冬也はと言うと……外でベンチに座っていた。それを

見兼ねたアタシは、冬也を無理矢理にでもお店の中に入れた！

冬也「何だよ……いきなり引っ張って」

リサ「えつと…冬也に服を選んで欲しいなあって思って。あつ、もちろん…冬也なりに考えた物でいいよ？」

冬也「わかった、決まっても文句言うなよ？」

そう言つて冬也は服を選びに行った。アタシはちよつと他のも見て来ようかな。

〔リサ side out〕

—————

そして少しした後……。

冬也「こんな感じはどうだ？……つて、あれ？おい、リサは何処行つた？」

手に持っていた服を元の場所に戻した冬也は、リサを探してお店の外へと出た。……
すると見知った顔が声をかけて来た。

? 「あら? 冬也じゃない」

冬也 「友希那? どうしたんだ、こんな所まで」

友希那 「失礼ね、私だつてここに来るわよ。そういう貴方は?」

冬也 「俺はリサとデートを……」

友希那から問われた事に答えようとする冬也だったが……次の瞬間!

? 「離して! 離してください!」

友希那/冬也 「!?!」

冬也 「今の声つて……」

友希那 「リサよ!……どうすれば!?!」

冬也 「取り敢えず、お前は警備員を呼んで来い! 俺はリサに絡んでる野郎を、捻り潰す!」

そう言つて友希那と冬也は行動に移す。その時の2人は自然と駆け足になっていた。

〔リサ side〕

不良A 「ねえ、君一人？可愛いね〜」

リサ 「何ですか？」

不良B 「この後暇？良かったら……俺たちとアソバナイ？」

リサ 「連れが居るので」

そう言つてアタシはガラの悪い人たちから離れようとする。するとその内の1人がアタシの手を掴んだ！

リサ 「離してください！」

不良B 「離すわけないだろう？」

不良A 「じゃあ……こうしよう！そのオトモダチと一緒にするのはどうだ？それならいいんだろ？」

リサ 「いや！離してください！」

不良B 「言う事を聞かぬえ悪いお姫様は、ちよつとキツイ躰をしなきやなあ？」

そう言つてもう1人がアタシに近づいて来る。……冬也、助けて！と思つた……その時！

? 「おうこら……人の彼女に手え出そうだななんて、良い根性してんじやねえか」

不良A 「ああ? なんだコイツ」

リサ 「冬也!」

冬也 「リサ、お前今まで何処居たんだよ!」

そう言つて冬也はアタシを叱る。叱ると言うよりもお説教されてる? と言つた方が正しいかも。アタシは正直に冬也に弁明をする。

リサ 「服を選ぶのがしばらく掛かりそうだったから、アクセの方を見に行こうと……」

冬也 「何だそんな事か……」

リサ 「そ、そんな事つて!」

冬也 「勘違いすんなよ?」

— そう言つた後に冬也はアタシの目を見詰める。……ああ〜カツコイイ! そんな思いを他所に冬也は言葉を続ける。

冬也「さつき言った『そんな事』って言うのは、『俺も一緒に行ってやるから』って意味だ。お前は可愛いから、他のオトコがリサを唆さないか心配だったんだよ」

リサ「と、冬也……／＼／＼」

不良A「ははっ、何言ってるの此奴」

不良B「締め上げる！」

不良『死ねえ！』

そう言い出すと共に、ガラの悪い人たちが冬也に向かって走り出した！……避けて、冬也！……と思うアタシの心配は杞憂に終わり……、

冬也「おいおい……人に『死ねえ！』だの吐かしてた割には、手応え無いな」

不良A「クソっ……ナメるなア！」

もう一度ガラの悪い人が冬也に向かって行った。……けど、もう遅いよ♪なんてって

……あれは。

冬也「チエツクメイト」

不良B 「つ、強え……」

不良A 「何もんだよ、此奴……」

冬也 「お前らに名乗る名は無い。……来たな。そして、消え失せろ」

冬也がそう言った先には、友希那と警備員が立っていた。先程のガラの悪い人たちは警備員に引き渡され、アタシは冬也と再び動く事にした。

—————

リサ 「それよりも、さつきはありがと♪」

冬也 「お安い御用だ。それに……大切な幼馴染であり、彼女なんだからな」

リサ 「／／」

アタシは冬也の言った事に顔を紅くしていた。それにしてもあの時はカツコよかつたなく。そう思っていると、最初に分かれた服屋さんに戻って来た。

冬也 「ほら、服を選ぶから……待ってる」

リサ 「うん」

そう言われてアタシは冬也をずっと見ていた。少しした頃、冬也がアタシの所に来て、服を見せて来た。

冬也「これなんてどうだ？」

そう言つて冬也が持つて来たのは、オレンジ色のTシャツに薄水色のショートパンツと黒の長袖のジャケットだった！

リサ「ちよつと試着して来るね〜！……あつ、アタシが着替えてる間に覗かないでよ？」

冬也「分かったから着替えて来い」

その言葉を聞いたアタシは、選んでくれた服を持つて試着室へと入った。その後の反応で、買う事に決めたけど……冬也が奢ってくれた！この分じや期待できるかもね？

「街中」

リサ「〜♪」

冬也「そんなので良かったのか？」

シヨツピングモールで一日を過したアタシたちは、家への帰り道を歩いていた。……
だって、今日だけで良い事がいっぱいあったんだもん！それは気分ものつて来るよ！

リサ「……あ、あのね？冬也」

冬也「どうした？」

リサ「今日は何の日か……覚えてる？」

アタシが冬也に今日の事について聞くと、冬也は少し首を傾げた！……覚えてるよね
？……なんてアタシの想いが真つ向から崩れ去るような答えが！

冬也「……すまん、覚えてない」

リサ「そ、そうなんだ……」

なんか、アレだけ気分がとても良かったのに……一気に下げられた気分……。そうだよ
ね、8年も離れてたんだもん。忘れてて当然だよね……。

〔リサ side out〕

〔冬也 side〕

俺がリサからの質問に答えた時、リサの様子が目に見えて落ち込んでいた。……不味いことしたか？

冬也「（こんな時に頼りになれる奴は……アイツしかいない！）」

ブルルルル!!!

友希那『何かしら、冬也』

冬也「友希那か？ちょうど良かった、少し話を聞いてくれ」

友希那『良いわよ。けど、手短に』

冬也「わかった。リサが落ち込んでしまった……今日が関係あるみたいなんだが、俺はすっかりそれを忘れてしまっただけ……」

友希那『アナタ、今まで忘れてたの!? 今日のリサの誕生日よ!? 誰だって、誕生日を忘れられたら落ち込むに決まってるじゃない!』

冬也「すまん……」

友希那『謝る矛先が違うわよ！……今日はリサと一緒に居てあげて！あなたが思い付く限りの事をしてあげなさい！』

冬也「わかった」

友希那『全く……。あら？という事は、私の誕生日も覚えてない？』

突然出された友希那からの質問に、言葉を詰まらせたように唸る。すると一拍あけて友希那が言う。

友希那『私の誕生日は10月26日よ。……それじゃあ今日はリサを慰めてあげなさい。それじゃ』

その言葉と共に友希那との電話が切れた。……どう慰めりゃいいんだ？

〔冬也 side out〕

—————

〔大空家：リビング〕

ショッピングモールの帰り道の途中、リサを復活させるために悩んだ末、冬也は家に

リサを泊めることにした。

冬也「リサは少し待ってる……ご飯を作ってくる」

リサ「……うん」

冬也はそう言つてリビングへと料理を作りに行った。そして少しした後、リサが動き出した。

冬也「リサ、今はご飯を作ってる所……え？」ギユ

リサ「……このままで居させて」

冬也「飯が終わったら、甘えさせてやるから……我慢しろ」

リサ「ヤダ、コノママガイイ」

いきなり抱きついてきたリサを引き剥がそうとする冬也だったが、リサが生気のない瞳で冬也を見つめた為、仕方無しにさせる事にした。……そして食事を終えた後。

リサ「……」グスッ

冬也「ごめんな？何とか機嫌を直してくれないか？」

リサ「……」

冬也「あつ、今日はお前の誕生日だったよな？ほら、ショッピングモールで買った服は、お前の為に残った奴だ……これで収まってくれないか？」

何とか機嫌を取るために持ち掛けては見たものの……リサは相当拗ねているらしい。そしてリサはこう発言する。

リサ「ずっとアタシと一緒に居て」

冬也「え？」

リサ「この先、何があっても……アタシから離れないで」

冬也「ゴメンなリサ……」

そしてしばらくの間、冬也は拗ねているらしいリサを唯々頭を撫でて慰めていた。

「大空家・冬也の部屋」

リサ「ねえ……冬也」

冬也「何だ？」

寝る為に訪れた冬也の部屋で、リサが冬也に声を掛ける。すると……リサはこう言う。

リサ「アタシの好きな曲……歌ってくれる？」

冬也「分かった」

そうして冬也とリサは眠りについた。その時のリサの顔は、少し微笑んでいるように見えた。

【誕生日回】 銀色歌姫の生まれた日

〔10月26日 金曜日〕

冬也「よし！今日はここまでだ！」

友希那「ありがとう、冬也。どうだったかしら、久しぶりに聞いてみて」

冬也「ああ。全員レベルアップしてる、この調子を維持すれば大丈夫だ」

友希那「そう……」

冬也は久しぶりに Roselia の練習に顔を出していた。今日も Roselia のマネージャーとして、良いアドバイスが出来たと自分を誇っている。

そして Roselia の練習後、冬也が帰り支度をしていると……友希那が声を掛けて来た。

友希那「冬也」

冬也「友希那、どうした？」

友希那「今日の事……お、覚えてるわよね？」

冬也「今日？」

助けを求めるように、冬也は近くに居たりサに目を向ける。すると、リサは既に『友希那の誕生日』と書かれた紙をチラツと見せていた。

冬也「友希那の誕生日だろ？」

友希那「ええ、そうよ」

冬也「あ、でもごめん……プレゼントは今は無いんだ」

友希那「そんな事、分かっているわ。だから……その……あ、明日、一緒に……出掛けましょ」

冬也「え？でも、明日はもう……」

冬也は翌日になると、友希那の誕生日が終わる事を言おうとしたのだが……友希那がそれを遮る。

友希那「良いのよ。今日は平日で、バンド練習もあつたし……仕方無かったもの。だから今日の代わりに明日、一緒に祝って欲しいの」

冬也「ああ、分かった」

そう交わしてライブハウスを後にする。そして今日はリサが冬也と一緒に帰っていた。そして、翌日を迎えた……。

――――
【翌日】

友希那「おはよう、冬也」

冬也「お、おはよう……友希那」

友希那「さ、行くわよ」

そう言つて友希那と冬也が訪れたのは、2人で過去に行った事のある『猫カフェ』だった。

――――
【猫カフェ：店内】

友希那「ふふっ、可愛い……にゃん♪」

冬也「（友希那のこんなになに笑つてる顔を見るのは……久しぶりだな）」

結論から行けば……猫カフェの中に入るなり、猫をこれでもかと友希那は撫で回していた。それを見た冬也は、軽く口許に笑みを浮かべていた。

友希那「?どうかしたかしら?」

冬也「……!な、何でもない……」

友希那「そう。……にゃん♪」

暫く友希那は猫の傍から離れる事は無く、冬也が頼んだ2人分の紅茶は冬也の分を除いて、すっかり冷めきっていた。

友希那「ふふっ……今日は連れて来てくれてありがと、お陰でとても楽しいわ」

冬也「お、お安い御用さ……」

友希那「……この後、私たちで何処かに、行ってみない?」

冬也「どうした?急に」

友希那「彼処に行きたいの……お願い」

意を決した冬也は、お会計を済ませて猫カフェを後にした。そして……2人の思い出

の地へと足を運んだ。

【河川敷】

友希那「……懐かしいわね、ここ」

冬也「そうだな」

友希那「覚えてるかしら、私と冬也がここに来る様になった切っ掛け」

冬也「ああ……あの頃は、確か……」

実は冬也と友希那は、二人揃って家出をしていた時期があり、その時ふと通り掛かった河川敷に、仲良く腰を下ろしていたのだった。（これは後に2人の親から、愚痴られた事であったのだが）

冬也「……そんな事もあったな」

友希那「あの頃がきつかけで、私たちは仲良くなれた……それは変えようの無い真実よ」

冬也「……行くか」

友希那「ええ……、待って！冬也、彼処！」

突然友希那が立ち止まり、ある方向へと指を指した。するとそこには……橙色に輝く、綺麗な夕陽が上がっていたのだ！

友希那「……キレイね……」

冬也「ああ……」

友希那「冬也」

冬也「なんだ？」

友希那「……1度しか言わないから、よく聞いてなさい」

冬也「お、おう」

少し紅潮した顔を俯かせて、そう宣言する友希那。互いの心臓の鼓動だけが、この空を支配していた。……そして意を決した友希那が、言葉を紡ぐ。

友希那「わ、私と……っ、付き合って……」

冬也「……」

友希那「この言葉、凄く恥ずかしいの……何か言って欲しいわね」

友希那が紅潮した頬を隠さずに言う。冬也は後頭部を少し搔くと、こう答えた。

冬也「ま、まさか……気持ちに通じ合うなんてな」

友希那「そ、それって……！」

冬也「俺の方こそ、お願いするよ……友希那じゃなきや、ダメなんだ」

友希那「ありがとう……これからは、二人の時間を大切にして行きましょ。勿論、バンド活動に支障のない範囲で」

冬也「そうだな」

そう言って2人はその場を後にする。その時、2人の門出を祝福するかのように……夕陽がさらに輝いた様な気がするのだった。